

昭和四十三年三月

史跡 薬師堂石仏
観音堂石仏 修理工事報告書
付阿弥陀堂石仏

福島県相馬郡小高町

昭和四十三年三月

史跡 薬師堂石仏
付阿弥陀堂石仏 修理工事報告書
史跡 觀音堂石仏

この報告書は、福島県相馬郡小高町泉沢に所在する、国指定の史跡薬師堂石仏、寺阿弥陀堂石仏および史跡觀音堂石仏（これらの石仏を、大悲山石仏とよんでいる）の修理報告書であります。

工事は石仏に対し、合成樹脂の噴霧含浸による岩質の強化、表層剥落止目的とするもので、修理に先立ち、文化財保護委員会事務局、文化財調査官西川杏太郎氏、同仲野浩氏の現状調査をうけ、修理に必要な岩質の調査には、東京大學の岩塙守公氏、合成樹脂の実験には、明治大学の桜井高景氏の協力を得、小高町が工事主体となり、修理には美術院国宝修理所が当り、写真測量の撮影には、奈良国立文化財研究所が、図化には東京大学生産技術研究所丸安研究室が担当し、昭和四十一年七月二十八日着手、昭和四十三年三月三十一日に完了しました。

総工費は、六百八十四万円で、国庫を初め、県より補助金の交付をうけて、施行しました。

この報告書においては、石仏についての概要、保存の経過、修理工事の概要、写真測量図化、修理記録の写真等を集録し、将来の参考に資することにしました。

本書の作成は小高町教育委員会が担当し、修理前における現状調査は西川杏太郎氏、修理記録の写真は美術院国宝修理所、写真測量の図化は東京大学生産技術研究所によるものであります。

無事に工事を竣工し得たことについては、国、県をはじめ、地元各位のご協力に負うところが多く、記して感謝の意を表します。

昭和四十三年三月

小高町長
吉　田　廣　衛

史跡 薬師堂石仏

付

阿弥陀堂石仏

史跡 觀音堂石仏修理工事報告書 目次

第一章 概 説

一、指定及名称	1
二、管理団体指定	1
三、概要	1
四、各石仏の概要	3
(一) 薬師堂石仏	3
イ、概要	3
ロ、法量	3
ハ、諸像の配置及形状	3
ニ、現状損傷等	3
(二) 阿弥陀堂石仏	3
イ、概要	3
ロ、法量	3
ハ、現状損傷	3
(三) 觀音堂石仏	7
イ、概要	7
ロ、法量	7
ハ、現状損傷	8
五、修理前までの保存の概要	9
(一) 藩政による保存措置	9

(二) 地元民による保存措置
(三) 保存のための組織
調査
合計
	11
	10
	9

第二章 修理工事概要

一、工事経過
二、工事仕様
(一) 昭和四十一年度
(二) 昭和四十二年度

第三章 写真測量

第四章 工事費

一、昭和四十一年度
二、昭和四十二年度
三、総工事費(昭和四十一年度・昭和四十二年度)合計

工事関係者

あとがき

写真目次

藥師堂付阿彌陀堂、觀音堂石仏修理
完成寫真

写 真 目 次

薬師堂付阿弥陀堂、観音堂石仏修理

完成写真

1、	薬師堂左端より(1)如来坐像	1
2、	薬師堂(1)の右側光背部塔	1
3、	薬師堂(2)の正面全身	1
4、	薬師堂(3)坐像正面全身	1
5、	薬師堂(3)の右側面	1
6、	薬師堂(1)～(2)中間菩薩形	1
7、	薬師堂(1)の左側面	1
8、	薬師堂(3)～(4)中間飛天	1
9、	薬師堂(4)本尊全身正面	1
10、	薬師堂(4)右側面	1
11、	薬師堂(4)左側面	1
12、	薬師堂(4)～(5)中間飛天	1
13、	薬師堂中央より右側全景	1
14、	薬師堂中央より左側全景	1
15、	薬師堂(6)懸落頭部正面	1
16、	薬師堂(6)懸落頭部後面	1
17、	薬師堂(6)懸落頭部右側面	1
18、	薬師堂(4)～(5)中間	1
19、	觀音堂正面	1
20、	薬師堂(5)正面全身	1
21、	觀音堂本尊全景	1
22、	觀音堂本尊中央部分	1
23、	觀音堂本尊頭部	1
24、	觀音堂木尊中央脇手	1
25、	觀音堂脇手左方	1
26、	觀音堂脇手左方2	1
27、	觀音堂脇手右方3	1
28、	觀音堂脇手右方1	1
29、	觀音堂脇手右方2	1
30、	觀音堂脇手右方3	1
31、	觀音堂左方脇手全景	1
32、	觀音堂左方脇手部分	1
33、	觀音堂左方脇手第2手持物	1
34、	觀音堂右方脇手全景	1
35、	觀音堂右方脇手第2手持物	1
36、	觀音堂左方脇侍群全景	1
37、	觀音堂左方脇手を含む脇侍群全景	1
38、	觀音堂左方脇侍群	1
39、	觀音堂左方脇侍部分	1
40、	觀音堂左方脇侍部分	1
41、	觀音堂左方脇侍部分	1
42、	觀音堂左方脇侍部分	1
43、	觀音堂右方脇侍群	1
44、	觀音堂右方脇侍群	1
45、	觀音堂右方脇侍群	1

46、	觀音堂右方脇侍部分	46
47、	觀音堂右方脇侍部分	47
48、	觀音堂右方脇侍部分	48
49、	藥師堂(5)・(6)中間菩薩立像	49
50、	觀音堂右方脇侍部分	50
51、	觀音堂左方龕上方面部	51
52、	藥師堂(6)正面全身	52
53、	阿彌陀堂正面	53
54、	阿彌陀堂正面	54
55、	藥師堂の右側端部の岩質硬化部	55
56、	藥師堂(6)の頭部を鉄製アングル台に固定した状態	56
57、	阿彌陀堂正面	57
	以上	29
		29
		28
		28
		27
		27
		26
		26
		25
		25
		24
		24

1、	藥師堂如來坐像(1)
2、	藥師堂菩薩立像(2)
3、	藥師堂坐像(3)
4、	藥師堂菩薩立像(4)
5、	藥師堂坐像(5)
6、	藥師堂菩薩立像(6)
7、	藥師堂平面圖
8、	觀音堂
9、	阿彌陀堂正面
10、	阿彌陀堂平面圖

図面目次

第一図、	三石仏付近地図	8
第二図、	三石仏の配置図	7
第三図、	藥師堂右仏の横断面図	6
第四図、	藥師堂縦断面図	5
第五図、	藥師堂廢仏復元想像図	4
第六図、	觀音堂右仏復元想像図	4
第七図、	阿彌陀堂正面図	4
第八図、	觀音堂右仏正面図	2

第一章 概 説

一、指定及び名称

種類	名 称	員 数	指 定 年 月 日
史跡	薬師堂石仏	六軸	昭和五〇年七月八日 第一八〇号
同	付阿弥陀堂石仏	一軸	同
同	觀音堂石仏	一軸	同

二、管理団体指定

発宗一二〇号

福島県相馬郡福浦村

史跡名勝天然記念物保存法第五条第一項ニ依リ左記ノ管理者ニ指定ス

昭和五年十一月二十四日

文部大臣 田 中 隆 三

史跡 薬師堂石仏

付 阿弥陀堂石仏

同

觀音堂石仏

(昭和四十三年三月原本写)

このように、石仏の所在する地方自治体が管理団体となつた。

といわれている。

三、概 要

この石仏は、福島県相馬郡小高町泉沢地内に所在する。

常磐線小高駅下車、南方約三キロメートル、旧国道西側約三百メートルの所にある。

この地は俗に「大悲山」と呼ばれ、相馬氏の支族大悲山氏が大悲山村（現在の泉沢）を本拠としていた。（鎌倉～室町時代）大悲山氏の名もこの三石仏の名に因んで称されたものである。

このことは大悲山文書（県指定、書跡、昭三〇、一、四、相馬胤敏氏所有）に次のように書かれている。

国宣 北畠顯家花押

行方郡大悲山事、如元可・令領知者、

執達如件

建武二年七月三日

右近持監清高奉

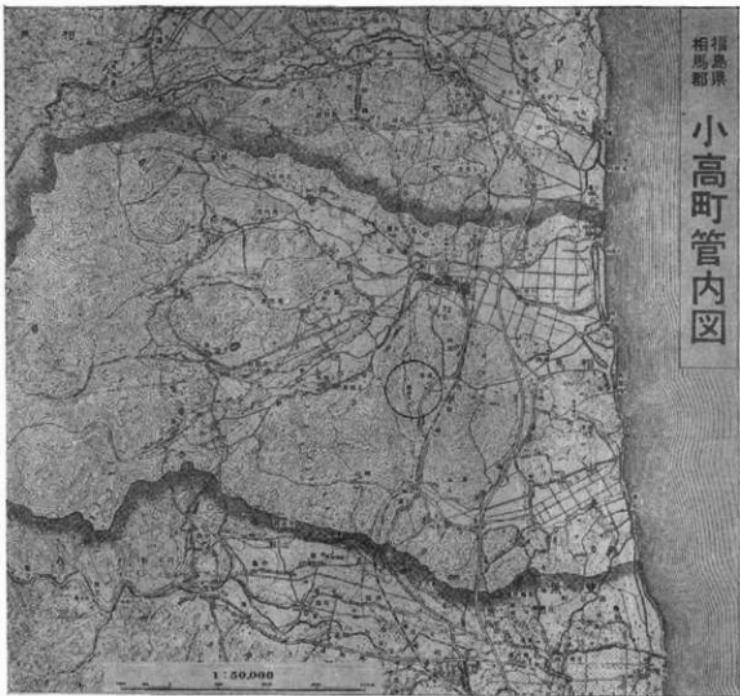
右近持監清高奉

足利尊氏、朝廷にそむき、南北朝の動乱期に突入した頃、本家である相馬家は北朝、分家である大悲山氏は、南朝という立場にあった。

しかし、この城館はどこにあるかは判明しない。

薬師堂より西方、約八百米のところにある上根沢の館跡が大悲山氏の居跡であるという説もあり、また、これより南方約三百米の「薬師前」という所か、あるいは、東方約五百米のところにある「金子坂」が当時の墨の跡ではないかといわれている。

小高町管内図



插図 1 三石仏附近地図

また、この「石仏」を管理するため、真言宗の慈徳寺が阿弥陀堂の東方約百米、今の地名「寺屋敷」にあったが、文和三年十月（一、三五二年）この寺が火災にあい、古来から伝わる記録や、名室を失ったのである。

その後、これより東方約六百米（現在の地名大久）に再建された。

この大悲山の村落は、元鎌時代には最も繁榮し、戸数も八十戸（現在四十六戸）と伝えられ、当地方の文化の中心地であった。

しかし、天明三年（一、七八三年）の飢饉には、二十戸、百二十二人に減少、さらに同六年には、戸数二十一戸、人口八十七人、馬十頭を失い、わずかに生在戸数八戸（うち慈徳寺一を含む）となつた。

また文化元年（一、八〇四年）には、田園十四町歩（一四ヘクタール）戸數十五戸（うち慈徳寺一）、人口九十三人（男四七内僧一、女四六）馬十三頭となり、その後天保（一、八三〇年頃）の飢饉に遭遇したことであるが、その状態をあらわした記録はみつからない。

次の弘化二年（一、八四五五年）の春の調査記録には、田二十三町二反（二三、二ヘクタール）、畑七町九反、（七、九ヘクタール）、人口は不明となつていて、このような歴史をたどりながら、大悲山慈徳寺は、明治三年まで存続されたのである。

大悲山の地名は、さきにのべたように、石仏に因んで付されたものであるが、のちに「大久」と改められた。

ところが、この地が度々の火災に遭い、むら人はすっかりおそれをなし、地名のなかに「ヒ」の音が「火」に通するためであろう、ということから、泉沢と改めたとのことである。

これは奥相志によるものであるが、それには次のように書かれている。

「旧名曰大悲山、後作大久、昔數有火灾、告謂邑名有火音故有火灾、因以改

泉沢、亦無火灾云々」

この石仏は、蜿蜒と連なる泉沢の丘陵斜面の岩肌を彫り凸め、ここに磨崖仏を高肉彫りにしたもので、薬師堂、阿弥陀堂、觀音堂の三堂よりなっている。

古老の碑には、大同二年徳大師の作と伝えられるが明確ではない。

専門家の調査によると、奈良時代の仏像の製作をうけついだ平安初期、あるいは、平安後期の作であるといわれる。

しかし、これらの石仏は、当地方では特にめずらしく、石造芸術の遺跡として、学術上極めて重要なものである。

薬師堂の境内には、「大悲山の大杉」（県指定、天然記念物、昭三〇、一、四、第六三号）が樹勢よくうつ茂り、石仏開基の當時を偲ばせる。

また盲人「玉都」と大蛇の伝説があり、それにかかる「蛇巻山」が薬師堂の真向に位置し、伝説を裏づけるような体裁をつくる。

さらにこれより北方約五百米のところ（地名浪岩という）には、浪岩古噴群（町指定、史蹟、昭和四、三、三）が列をなして、二つの丘陵に並び由緒深いところである。

四、各石仏の概要

(一) 薬師堂

イ 概 要

石質は、第三紀砂岩といわれているが、岩質がところによって相違し、硬目

のところ、軟弱なところ、あるいは泥土化したところなど不均一である。

天井は水平に、後壁は、彎曲した轍をうがち、ここに諸尊を高肉彫に刻出している（台座共）。

また、各尊の光背は、後壁に薄肉彫および線彫りであらわしている。

彩色は肉身部に黄土、衣部に丹彩が残るがもとは、光背の覆輪に金箔、その他に群青がみられたという。

しかし、これら彩色が当初のものか否かは不明である。

ロ 法 量

龕 間 口

一五、三〇米

奥 行

五、二〇米

高 さ

五、四五米

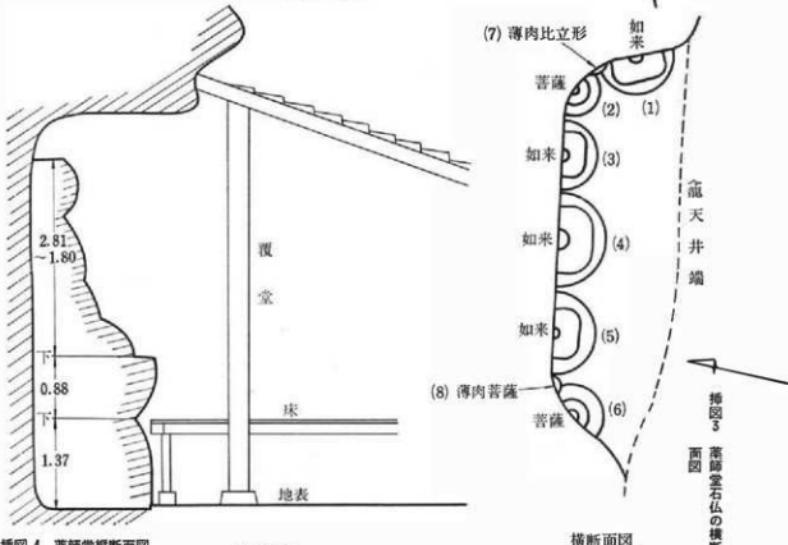
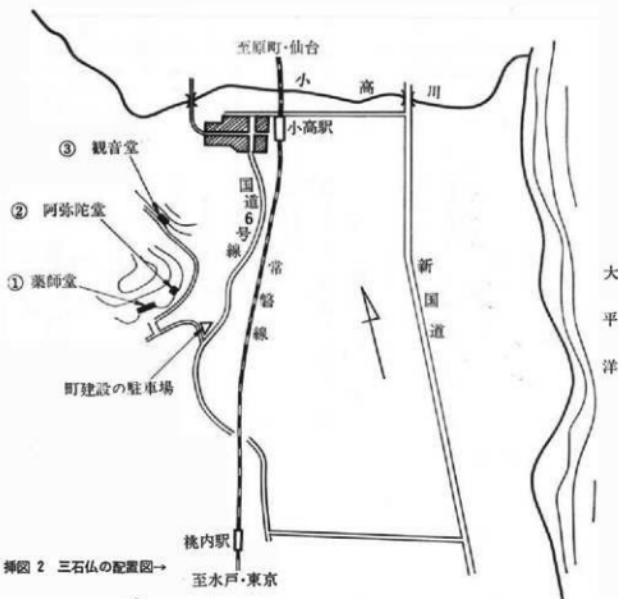
台座運華高 基 壇 高

各々約一、三七米

諸尊最大巾 (合座で)

三、七〇~一、〇〇米

二、二七~一、二五米





挿図 5 大悲山薬師堂磨崖仏復元想像図（美術院国宝修理所作製）

ハ

-

諸像の台座は①～⑥までは各々後壁より半円形に彫出し、蓮



插図 6 大悲山觀音堂石仏復元想像図（美術院国宝修理所作製）

花座（二辺切付蓮弁）を形成するが、蓮花の下は崩れ形状不明。光背は、全像各々二重円光を後壁に薄内形および線形であり、あらわす。

①如来分は二重覆輪連珠文、二重覆輪雲唐草、二重覆輪鉢文、周像火焔に造る。

二 現状損傷等

①、各像とも、顔面はほとんど欠損亡失（⑥菩薩像の顔面彫落断片のみ別保存、両手も欠損著しく印相等は不明である。

台座は蓮花以下は形状不明

②、全面表層の朽損彫落甚大で、残存部（重要な彫刻面を残すもの）も浮上り、剥落進行中である。

③、母岩部も朽損著しく、ところによつては粉化している。

④、全面の石質は均一でなく、大略上半部より下半部の方が石質もうく、特に龕左端の菩薩⑥およびその外側は土化して崩壊しつつあり、ここに蔓草の根がはつている。

因みに諸像配置の構成を考えると、この部にはもし左端に如来坐像①と同形のものが刻まれていたのではないかと想像される。

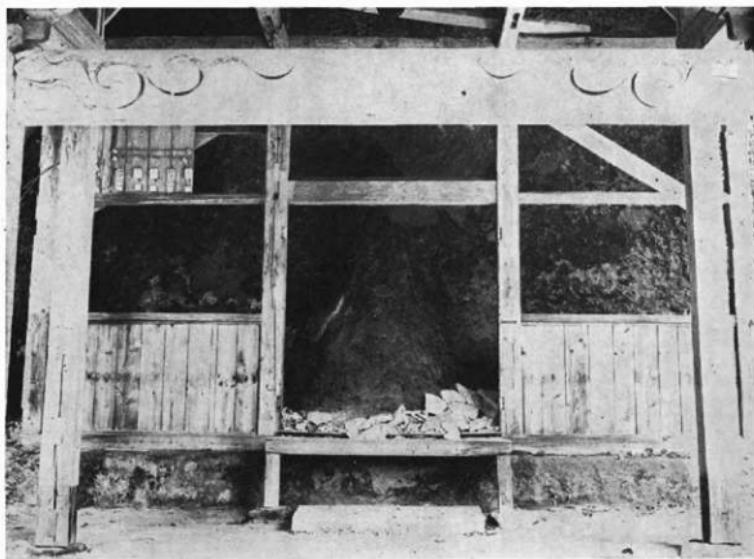
⑤、龕上半部は岩に湿気を含んでいるように思われ、夏季には天井より水滴が落するという。

⑥、部分的であるが、ところどころに青黒、苔の発生がみられる。

〔二〕阿弥陀堂

イ 概 要

薬師堂の北東約百米程の所にある一龕で、石質は薬師堂と同じく、



插図7 阿弥陀堂正面

石仏はほぼ南向きになっている。
形もあきらかでない程に朽損し、龕中央に像かと思われる凸氣を残すのみである。
像は坐像であったかと思われる。

口法量

朽損甚大で計測困難であるが、

龕の間口	約三、〇〇米
奥行	約二、〇〇米
高さ	約四、〇〇米

(二) 観音堂

イ 概要

阿弥陀堂よりさらに北東へ迂回して約四百米程の所に位置する。
岩質は第三紀砂岩で薬師堂と同質である。本尊は、十一面千手觀音坐像
で、頭部、地蔵部に化仏を頂き、最上段の脇手（両手）で如来形化仏を頭
頂にあげ、他の脇手は各持物を執る。

口法量

龕	間口	約一三、〇〇米
觀音坐像	奥行	約一二、七二米
台座全高	高さ	約一二、〇〇米
推定	高さ	約五、五〇米
推定	台座全高	二、〇〇米

化仏坐像（二重円光および台座付）多数を一面に薄肉形で彫り出する。質
劫三千仏と伝えられ丹彩が残る。

ハ 現状損傷

①、阿弥陀堂同様、岩質大損基大で、千手頭部上半部および脇手上方分左
右七箇所計一四箇所、およびその左右の化仏を残し、ほとんど表層剥離落朽
損している。（地表より約一メートルのところ、左右壁面に化仏各一箇残
る、大略地方より七センチのところより一二センチの高さの間に、
表層彫刻面を残している。

②、残存の表層部も剥離の危険がある。
③、地上五〇センチ高のところに、横に断層が走り、この部いぐぐれ。
④、この龕は、覆堂に壁をはらず、通気がよいためか全面にわたりよく乾
燥しているように思われる。

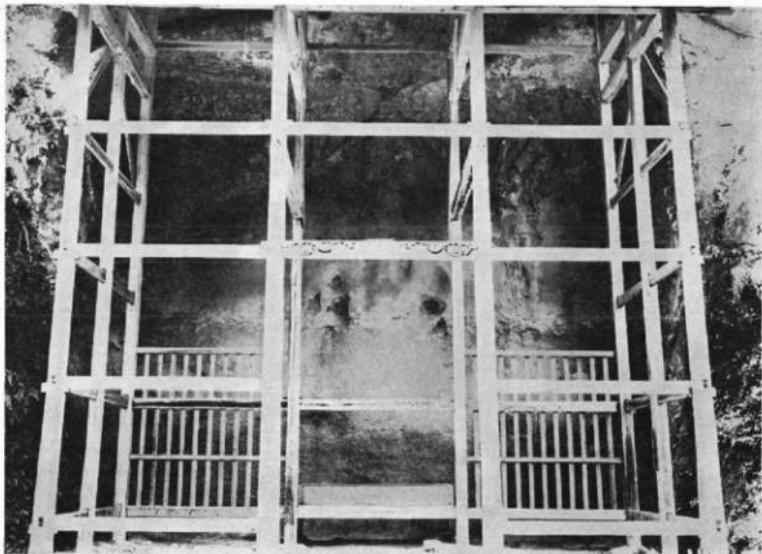
以上は修理前の昭和四十年八月十日と十一日の二日間にわたる文化財保
護委員会事務局美術工芸課文部技官西川杏太郎氏の調査によるものである
が、さらに同氏からは、その保存対策として次のように報告されている。

前記のような現状であるが、このまま放置すれば、もっともよく残る薬
師堂諸像なども、遠からず阿弥陀堂や觀音堂のように、朽損崩壊するもの
と思われ、緊急の保存対策が望まれる。

保存の方法は、先年実施した樹木県大谷の磨崖仏（特別史跡、重要文化
財指定）の合成樹脂による岩質の強化、表層剥離落止めとした保存修理に
準じた方法がよいのではないかと思われる。

すなわち、(1)、合成樹脂含浸による岩質強化、（大谷の場合、アクリル
エマルジョンを使用）

(2)、合成樹脂接着剤による表層剥離落止め、亜鉛接合（大



插図8 鍾音堂石仏正面

その他

谷の場合エボキシ樹脂を使用)などである。

(2) 地元民による保存措置

〔2〕、薬師堂向って左端岩壁の土化崩壊防止策

なども必要かと思われる。

なお、以上のような修理を実施するすれば事前に気象、地形の学術調査、

岩質調査、施行用樹脂の実験、調査なども行なう必要があらう。(以上の調査は、昭和四十年八月十日、文化財保護委員会、美術工芸課文部技官、西川杏太郎氏による)

五、修理前までの保存の概要

(1) 藩政による保存措置

元亨三年四月(一三二三年)、相馬孫五郎重胤公が、関東(千葉國)より下向して以来、ゆうゆう数百年間、連續としてこの地を領しつづけた公は石仏を崇敬され藩費をもって保護を加えられた。

しかし天明の飢饉以後、藩の財政が窮乏し、藩政改革を行われ、文政に至り藩費を廃して修理料として製糞料を与えられた。のちまたこれも廢止されたが、相馬昌胤公に至り、金一封の寄進があったので、これを右伝持の基金とし、その管理は小高郷陣屋で担当し、その利殖は三百両に達したとのことである。

その後、戊辰の役にあい整理も容易でなくなり、わずかに二、三十両の証書を残すのみとなつたが、のちまた廢藩(明治四年)となり、その基金は消滅した。

この三堂のうち、薬師堂の龕は、地元の人たちの協力により、貞和元年(一三四五年)に建てられた。

さらに貞享元年(一、六八四年)に至り、老朽化した龕の再建が行われ、明治八年二月には、三度目の改築が行われた。

これと同時に、阿弥陀堂の龕も建てられたのである。

この建築によって、千古繁茂した境内の樹木を伐材し、その費用にあて、なお爾後の保存維持のための基金として、残木を売却し、金三十両を備えた。

○信徒の保護願出

明治十一年法律をもって、在郷寺院、仏堂が廢止処分されることになったので、翌年五月信徒協議の上、三石仏の安置廟を提出した。

監守

行方郡南小高村

金性寺住職

新発田文硯

願人

行方郡大久村

惣代

清信鶴左衛門

右戸長

下浦続晴

明治十二年五月二十日

福島県令 山吉盛典殿

また、これより十数年後には、

○御届 第八種該當仏堂 内務省訓令第三号第一条八種により、薬師堂、付

明治二十八年七月二十六日

阿弥陀堂、觀音堂に付云々

信徒總代 鈴木治左衛門
福浦村長 渡部 邵

昭和三十六年より現在

茂木 熊太郎

○御届 今般宮内省監侍全国宝物取調局員青山盈毅氏本年九月中寫真像を実

施せられ、その彫刻の精巧妙技全く稀有のものに依り縁起取調差出
べき旨御連に相成云々

明治二十九年十一月十三日

福浦村泉沢

信徒歿代 清信祐治 同 鈴木治左衛門

福島県知事 小倉信近殿

観音堂の最初の龕の建築は明瞭でないが、明治三十年十月に石仏の一部が落
石して、龕が倒壊したため、同年十一月に仮の龕を建築した。

また翌三十一年には薬師阿弥陀堂の屋根替え、同年六月には薬師堂石段の
改築、三十七年五月には、石仏管理のための庵を建て、同時に堂守として、
井戸川寛夢（本名忠兵衛）の入居を得たが、わずか数カ月で死去して、

昭和五年七月に至り、現在の保存会館を建て、堂守をおいて保存にあたって
いる。

堂守名

昭和五年十二月四日より十二年まで

岡田隆界

（本名重太郎）

昭和二十一年より三十三年まで

丹伊田信亮

昭和三十三年より三十六年まで

薬師堂、阿弥陀堂、觀音堂の三龕は、屋根は草屋根で覆われ、完全な保存状
況でなかつたため、老朽化した龕の再建をはからうと、地元保存会や、町が中
心となって、国や県からの補助金をうけ、薬師堂と阿弥陀堂は昭和二十八年
に、觀音堂は昭和二十四年に、それぞれ改築が行われ、現在のような瓦葺きの
莊嚴な建物となつた。

このように、地元の人たちによる石仏保存の意欲は古より強く、保存維持の
ための資金として、石仏の附近に造林を行い、また明治十三年には、三堂の修
復のため、地元有志 五名（鈴木治左衛門、石田太郎右衛門、清信祐治、
梅田伊之助、遠藤庭清）から、基金として玄米十俵が貯えられ、明治三十九年
にはさらに五名（鈴木治左衛門、清信祐治、梅田易治郎、遠藤利清、石田太郎
右衛門）により米十四俵が備えられ、これが石仏保存のために大きな役割を果
したのである。

（三）保存のための組織

明治三十一年、地元の人たちにより、保存会設立の氣運が発生したが、目的
は達せず、三十七年に至り、堂守の庵を設置するのみにとどまつた。

明治四十二年に至り、二本松金治郎、鈴木治左衛門、島田菊松氏らにより、
大悲山念仏講を組織し、保存と信仰につとめた。

また大正末期頃になると、薬師堂の朽損は一そうはなはだしくなつたので、
これを改築すべく、寄付募集の計画をたてたが、実施不能となつた。

しかし雨漏りははげしさを増し、放置することができない状態にあった。

昭和二年九月二十三日、半谷清寿氏が小高公会堂において「石仏保存の必要性を説いた。その後、地方住民の石仏保存に対する关心が高まり、同年九月二十六日には、保存会設立総会の遊びとなり、二百余名が参加した。

保存会の結成に伴い、石仏に関する必要な資料の蒐集、あるいは文書の起草には、三島庄蔵氏があたり、初代会長には、福浦村長吉昭親氏、顧問には半谷清寿氏、鈴木重郎治氏、佐藤仁右衛門氏を、その他幹事には數十名が選ばれ運営にあたった。

四 調査

第二章 修理工事概要

一、工事経過

前述のように、この三石仏の龕はさきに改築し、保存のためには町と保存会が協力して、管理に万全を期すべく、努力をつくしてきたのであつたが、逐年石仏の表面剥落がはなはだしくなる状況にあつたため、今のうちに何等かの方策により修理を行い、保存の措置を講ずる必要があるということから、昭和四十一年六月十二日、小坂委第一八四号をもって、當時の大悲山保存会長半谷専松氏（当時町長）が、文化財保護委員会に石仏の損傷状況と保存修理の方法等について、調査・指導を依頼したこと、同年八月十日より二日間にわたり、同委員会美術工芸課の文部技官西川杏太郎氏が調査に来町され、「第一章四、各石仏の概要」

の概要」の項に述べたような調査結果の報告をうけた。

石仏に合成樹脂を噴霧含浸させることにより、石質の風化を防ぎ、保存することができるとの指導を得たので、町が県や文化財保護委員会を通じて、美術院国宝修理所（京都国立博物館内）に設計や経費の調査を依頼したところ、昭和四十年十月十五日より二日間にわたり、同修理所長西村公朝氏と、同所技師小野寺久幸氏が現地調査に来町され、翌四十一年四月にはその結果が報告された。

その内容には、石仏の法量、形状、品質構造、損傷状況、修理の方法、経費等について詳しく述べられている。

法量、形状、品質構造、損傷状況等は、さきの「第一章四、各石仏の概要」

に記載した、西川杏太郎氏の調査記録と同じであるのでここでは省略する。

また、「修理の方法」については、この章の「工事の仕様」のところに掲げることにして、経費の項も後述する第四章の「工事費」のところと同じなのでこでは省略したい。

文化財保護委員会と、美術院国宝修理所との調査により、保存修理の可能なことが明らかになったので、昭和四十一年四月二十日、小教委第一五一号をもつて、国や県に修理に関する指導と補助金交付の申請をした。

合成樹脂を利用した石仏の保存修理は、わが国では栃木県大谷の磨崖仏（特別史跡、重要文化財、昭和四十年保存修理完了）が最初で、他に例のないところであった。

二度にわたる調査結果の指導により、岩質の調査、それに適合する合成樹脂の研究調査を行い、修理に適応のないよう万全を期するため、岩質の調査研究には東京大学の岩塙守一氏に、合成樹脂の実験には明治大学の桜井高景氏にそれぞれ委託し、昭和四十一、四十二年の二度にわたる両氏の現地調査をいただき、その後の研究結果に基づいて修理実施の運びとなつたのである。

修理は、合成樹脂の噴霧含浸を主とする関係から、比較的高温な時機を選び、昭和四十一年度は、七月二十八日より九月二十二日までの五十七日間、四十二年度は六月一日より八月五日までの六十六日間、計一二三日、延九四〇人におよぶ美術院国宝修理所の技師が、小野寺久幸現地主任を中心として、大悲山寺務所に宿泊し、修理工事に従事された。

二、工事仕様

(一) 昭和四十一年度

薬師堂を次の通り実施した。

- 1、ミソ穴（岩石に埋まっているもの）のところが自然に風化して、その石が落ちた。
- 2、全面に「アクリルエマルジョン」樹脂を噴霧含浸させ、岩質を強化した。
- 3、割損浮上り部は「エボキシ」樹脂を用いて接着強化した。
- 4、ミソ穴（岩石に埋まっているところ）に似た朽損部には、「アクリル、エマルジョン」樹脂三〇パーセントを電球による熱乾燥とした。（摄氏七〇～八〇度）
- 5、右側壁の岩質で完全な風化部は「アクリルエマルジョン」で硬化した。
- 6、右側の菩薩頭部の離落部は「アクリル、エマルジョン」樹脂二〇パーセントを噴霧含浸して硬化した。
- 7、原則として、現状維持を目的とし、欠損部は補わなかった。
- 8、以上の修理箇所は、すべてその近辺の色に合せて樹脂で着色した。（同質砂岩の粉末を混入）

(二) 昭和四十二年

阿弥陀堂、観音堂、薬師堂の一部に次の通り実施した。

- 1、殺殺および苔、樹根等の除去を行った。
- 2、全面に「アクリルエマルジョン」樹脂を噴霧含浸させ、岩質を強化した。硬化は電球による加熱乾燥とした（摄氏七〇～八〇度）
- 3、割損浮上り部は「エボキシ」樹脂を用いて接着強化した。
- 4、ミソ穴に似た朽損部には、「アクリルエマルジョン」樹脂三〇パーセントを使用し硬化した。
- 5、阿弥陀堂の落下した表皮石片は別保存した。

- 6、薬師堂右側の壁部で岩質が完全に風化した部は、浮上り部を除去して再硬化した。
- 7、薬師堂、右側苔蘚の離落していた頭部は、鉄製アングル台に固定し、別保存した。
- 8、原則として現状維持を目的とし、欠損部は補わなかった。
- 9、以上の修理箇所は、すべてその周辺の色によって樹脂で着色した。
- 10、薬師堂龕の屋根の葺き替えを行った。
- 11、瓦を全部はぎ、下にルーフィングを敷いて葺き直し、こわれた部分は新しい瓦を全部はぎ、下にルーフィングを敷いて葺き直し、こわれた部分は新しい

第三章 写 真 測 量

石仏の調査で、実測図の作成については、実体写真測量の技術を導入して実測を行い、その記録を保存することにした。

この方法は、仏像に直接手を触ることなく、測定が立体的に行える上、写真全体にわたって一様な精度で測定ができる。撮影された乾板（フィルム）を保存しておけば、必要に応じ測定機械によって、いつでも仏体の再現ができ、三次元的に精密な測定や、因化することができる。

測定には、全体の表面積や、体積の算出、または、任意な場所の断面積など、要るに応じた測定を、電子計算機との組合せによって、簡単に得られるといった作業上の利点がある。

いかに合成樹脂を用いて、修理を加えた石仏、完全に現状のまま、永久に保存することは容易でない。

長い風化のはたらきにより、極微量に変化していくことも予想される。これからのがい歴史の間に、たとえ仏像に少しの変形が生じたとしても、

ものと、とりかえた。

瓦のつぎ目のよくないところには、銅板を使って雨漏りのないようにした。

11、薬師堂龕の、右外側部分よりの風雨の侵入を防ぐため、銅板をとりつけた。

12、薬師堂龕右側部分の、岩石表面の土化した層をはぎ、樹根や草蔓の侵入を防ぐようにした。

図面の作製については、昭和四十三年一月十七日、財團法人生産技術研究奨

撮影の時点における仏体の復元は、必要なときに応じて、いつでも再現でき、そのため貴重な資料となる。

近年、写真測量の応用範囲はきわめて広く、單に文化財の保存上の利用のみでなく、道路、鉄道の建設作業や、土木関係の測量に、また森林、土地の調査、その他種々な計画調査に、あるいは自動車の車体線図作成、人間工学の分野における人体計測、建築物の測定など、各方面に活用されている。

このように、文化財の測定で写真測量の方法は、現状測定として、保存修理の上で欠くことのできない手段となっている。

撮影作業に関しては、昭和四十二年十一月十五日より同月二十四日まで、奈良国立文化財研究所、文部省官牛川喜幸氏を主任として、四名が来寺され、三佛の石仏の撮影を、ドイツ、カールツァイス社製、SMK40、同20スレオカメラを使用して行った。

動会に委託し、さきに撮影された乾板写真を用い、立体図化機（スイス、ワイルド社製A7オートグラフ）によって行われ、同年二月二十九日完成した。

この因化によって、次の因面が作製された

写真測量用の基準点の設置と撮影点の設定の為に使用、分度盤は一秒読みで精度は数秒である。

c、その他器材

スチールテープ、水素および水球、乾板（撮影用）

阿苏蛇堂石仏
六軸の正面図 縮尺 六分の一
全體の平面図 縮尺 二十分の一

阿苏蛇堂石仏
正面図 縮尺 六分の一
平面図 縮尺 六分の一

観音堂石仏
正面図 縮尺 二十分の一

二、圖化

a、ツアイス製SEG V偏重修正機

b、ツアイス製SEG V偏重修正機、乾板の伸し機、水平、垂直撮影におせるよう傾斜を与えることができる。

a、○カール・ツァイス製、SMK 120ステレオカメラ
測量用カメラ、二台を測桿の両端に固定してあり、両カメラの軸は、平行になるよう正確にセットされている。レンズは、ほとんど無収差に近く、焦点距離は六〇mm、絞り一、両カメラ主点間の距離（撮影基線）はSMK 40では四〇mm、SMK 120では一米二〇mmにそれぞれ固定セットされている。

b、ウイルド製A7オートグラフ
万能図化機、航空写真および地上写真からの因化測定ができる。

X Y Z の三次元測定の内、YZギヤーの交換によって、地上写真でも平面図の作成ができるようになっている。
また、座標の自動記録装置（EK 3）がついていて、因化すると同時に三次元の数値で座標が得られる。

b、ウイルド製T2セオドライト

第四章 工事費

一、昭和四十一年度

収入

小高町負担額

六七三、〇〇〇円

支 出	福島県補助額	三三三、〇〇〇円
工 事 費	国庫補助額	一、〇〇〇、〇〇〇円
雜 收 入 額	雜 收 入 額	二、〇〇六、〇〇〇円
合 計	合 計	一、八八八、〇〇〇円
		一、八八八、〇〇〇円
	修理工事請負費	一、〇九八、〇〇〇円
	石仏修理請負費	七六五、〇〇〇円
	電気工事請負費	二五、〇〇〇円
	足場材料	六八、〇〇〇円
	人件事務費	二四、〇〇〇円
	人 件 費	四四、〇〇〇円
	事務費	五〇、〇〇〇円
	委託調査費	五〇、〇〇〇円
	岩質、合成樹脂調査実験	二、〇〇六、〇〇〇円
	合 計	二、〇〇六、〇〇〇円

二、昭和四十二年度

收 入	一、五四九、〇〇〇円
	小高町負担額
	福島県補助額
	国庫補助額

支 出	福島県補助額	三、六二六、〇〇〇円
工 事 費	電気工事請負費	三、六二六、〇〇〇円
雜 收 入 額	修理工事請負費	二、八四〇、〇〇〇円
合 計	修理工事請負費	二、八四〇、〇〇〇円
	足場材料	一六一、〇〇〇円
	人件事務費	五七三、〇〇〇円
	人 件 費	四八〇、〇〇〇円
	委託調査費	五〇、〇〇〇円
	岩質、合成樹脂調査実験	四三〇、〇〇〇円
	寫真測量図化	四、八四〇、〇〇〇円
	合 計	四、八四〇、〇〇〇円

三、總工事費（昭和四十一年度）合計

支 出	福島県補助額	二二二、〇〇〇円
工 事 費	國庫補助額	一、一〇七、〇〇〇円
雜 收 入 額	國庫補助額	三、三三一、〇〇〇円
合 計	國庫補助額	六、八四六、〇〇〇円
	小高町負担額	一九五、〇〇〇円

工事関係者

修理工事請負費	五、五四〇円
石仏修繕請負費	三、九三八、七五〇円
電気工事請負費	二五〇円
足場材料	四一〇、四六〇円
薬師堂右側部分と屋根修理	八二一、〇〇〇円
人件事務費	一八五、〇〇〇円
人 件 費	五三〇、〇〇〇円
事務費	一〇〇、〇〇〇円
委託調査費	四三〇、〇〇〇円
岩質合成樹脂調査実験	六、八四六、〇〇〇円
写真測量圖化	合計
工事關係者	
町 関 係	
町 長	杉 鈴 吉
助 役	木 田
收 入 役	吉 忠 廣
町議會議員	重 雄 德 衛
議 長	村 田
副議長	杉 田
議 員	横 山
未 永	松 晴 助
龜 之 助	勇 助

副委員長

保存会關係

顧問

木 鈴 清 佐 木 森 井 清 齊 梅 吉 松 鈴 渡 半 相 渡 豊 岩 大 天 松
 戸 戸 川 信 藤 田 本 木 部 谷 馬 部 田 曲 嶋 野 本
 篠 木 信 信 正 德 廣 重 晴 小 鳩 翔 武 敏 秀
 知 龍 清 昌 信 正 德 廣 重 晴 小 鳩 翔 武 敏 秀
 農 拓 雄 助 手 稔 勝 (教育長) 松 (前町長)
 博 (公民館長) 雄 (町總務課長) 治 (県議)
 清 (町産業課長) 稔 (町長) 及 (商工会长) 雄 (文化財委員)

慈徳寺住職

工事指導
文化財保護委員会文化財調査官
同福島県教育長
県社会教育課長研究調査
同
主事研究調査
同
主査研究調査
同
主事研究調査
写真測量撮影
奈良國立文化財研究所研究調査
文部技官研究調査
文部技官研究調査
写真測量撮影

東京大学生産技術研究所

工学博士
文部技官
文部技官

朝 鈴 丸 伊 平 個 牛 櫻 岩 長 今 佐 折 西 仲 原
 生 木 安 東 田 川 井 塚 岡 野 薩 笠 川 野
 郁 芳 隆 太 幹 喜 高 守 ハツイ八郎 正四郎 与杏太郎 浩
 三 朗 和 作 寛 雄 幸 景 公 ハツイ八郎 正四郎 与杏太郎 浩
 教仙

事務担当	木工事	電気工事	同	同	同	同	同	同	同	同	技師長	工事從事者	美術院國宝修理所
遠坂永佐	石	大和田	伊	山	中	長	池	飯	白	高	中	西野寺村	和良品
藤本岡藤	田	田	佐	崎	村	棹	田	田	石	橋	西	村	
昌喜久雄	一	健	隆	孝	竜	太雅	和	俊	和	久盛	公	朝幸	門長
弘(事業課建設係長)	男	一	周	司	一	郎	彦	雄	夫	二	二	(現地主任技師)	

あとがき

この石仏は、当地方における石造芸術として、全国より高く評価されていたものであるが、石仏の朽損は一そうはげしくなる状態にあったので、何らかの保存措置を講じ、これを長く後世に伝えるべく、多年にわたり思索されて來たところであります。

幸い近年、栃木県大谷の磨崖仏が、合成樹脂による修理が行われ、これが石質を強化し、風化を防ぐことのできることが判明したため、当町においても、関係機関の指導と協力を得て、研究調査の結果、修理実施の運びとなつたのであります。

なに故にも、このような修理は、当町としても初めてのこととて、工事の施行にあたられた、美術院国宝修理所の方々にも、ご満足を得るような、お世話のでき得なかつたことを謝する次第であります。

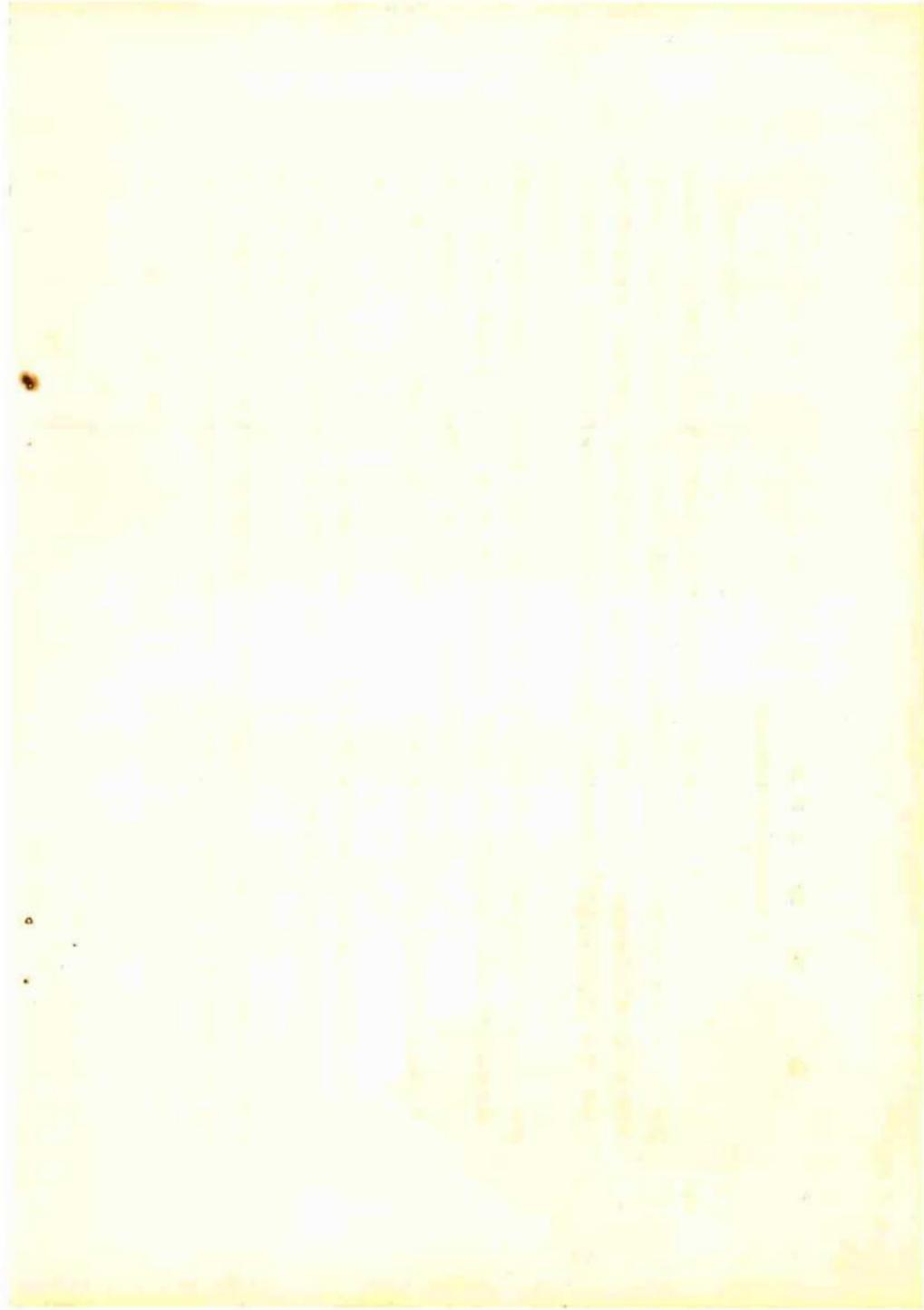
また、文化財保護委員会をはじめ、県、奈良国立文化財研究所、財團法人人生産技術奨励会、並びに岩質の調査実験、合成樹脂の研究等を担当せられた岩塙、桜井の両氏などより、格別のご指導とご協力を賜りましたことについて、感謝申上げます。

この報告書は、東京大学生産技術研究所丸安研究室の鈴木芳朗氏、文化財保護委員会の西川杏太郎氏、仲野 浩氏、当町の渡部晴雄氏、相馬胤敏氏、清信正穂氏等より、資料の提供とご指導をいただき、当教育委員会事務局の社会教育主事古内 弘氏がまとめました。以上の諸氏の御厚志に対し謝意を表するとともに、この報告書が後世における、石造文化探求のための資料として、少しでも役立つところがあれば幸いに存じます。

昭和四十三年三月

福島県相馬郡小高町教育委員会

教育長 斎藤勝





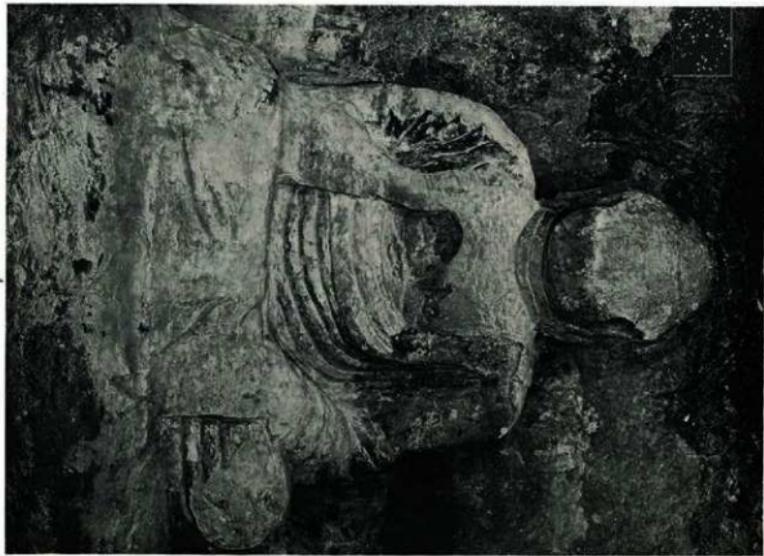
美術館左側より(1)の光像



美術館(1)の右側光像



行者坐像(西夏開國の王)



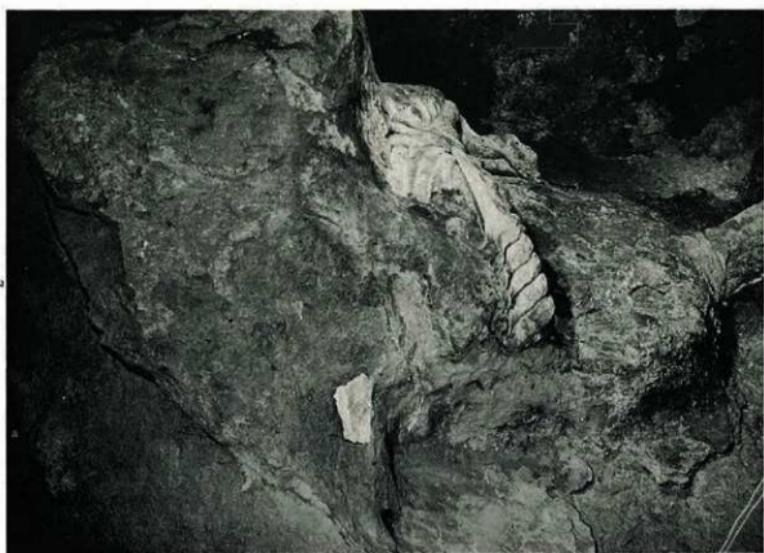
行者坐像(西夏開國の王)



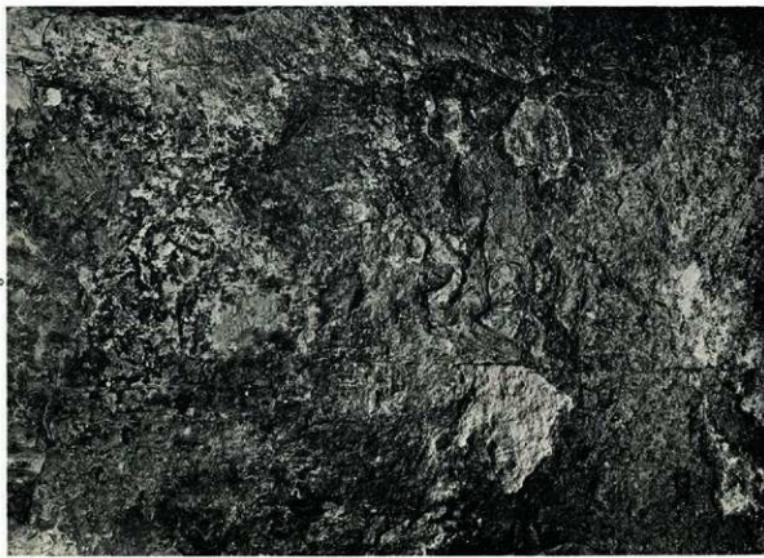
秦陵北侧的石质山



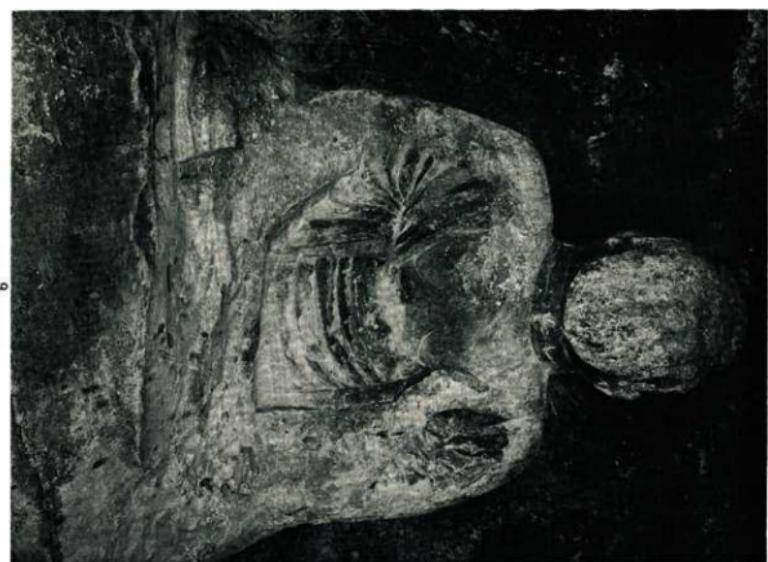
秦陵东侧的石质山



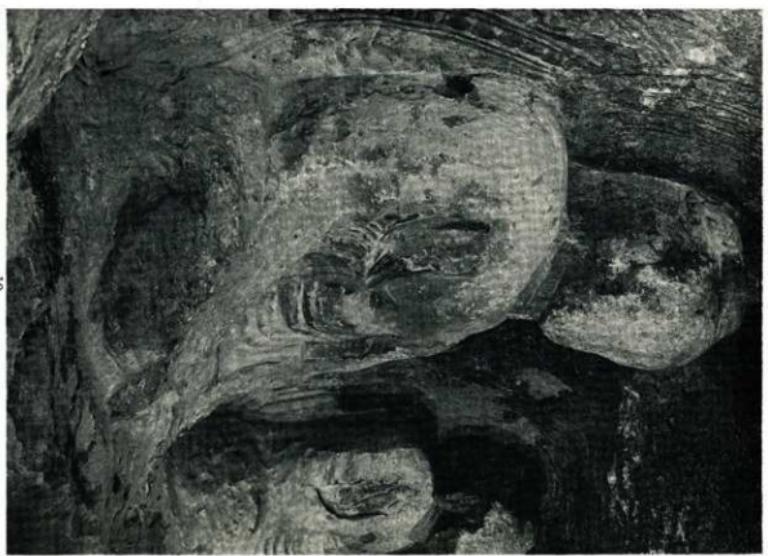
莫爾登(1)石側面



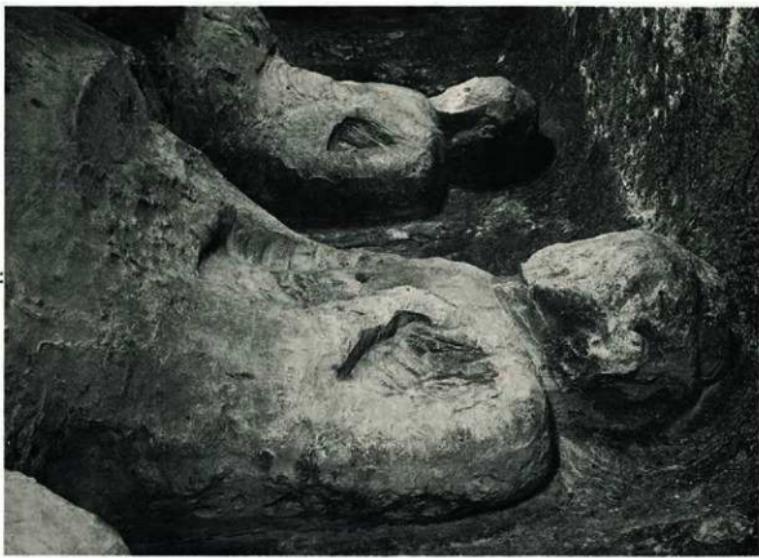
莫爾登(2)中間飛天



崇禎帝(木排子身正師)



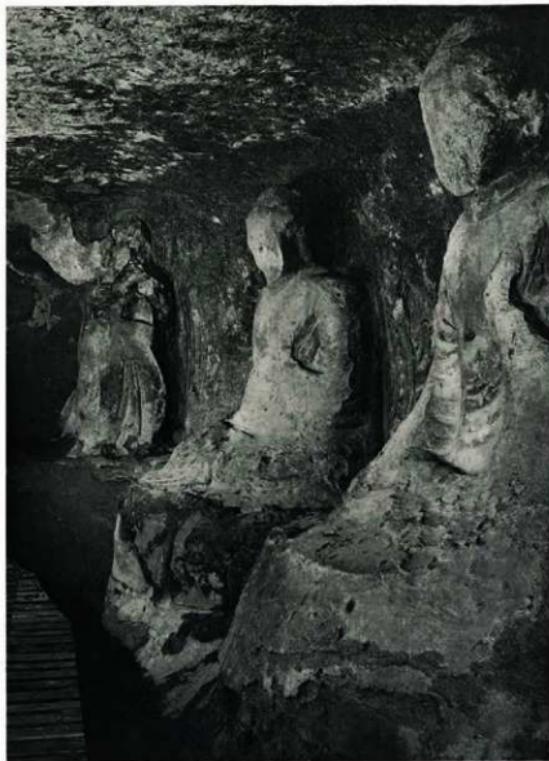
崇禎帝(石前師)



樂隊堂(4)左側面

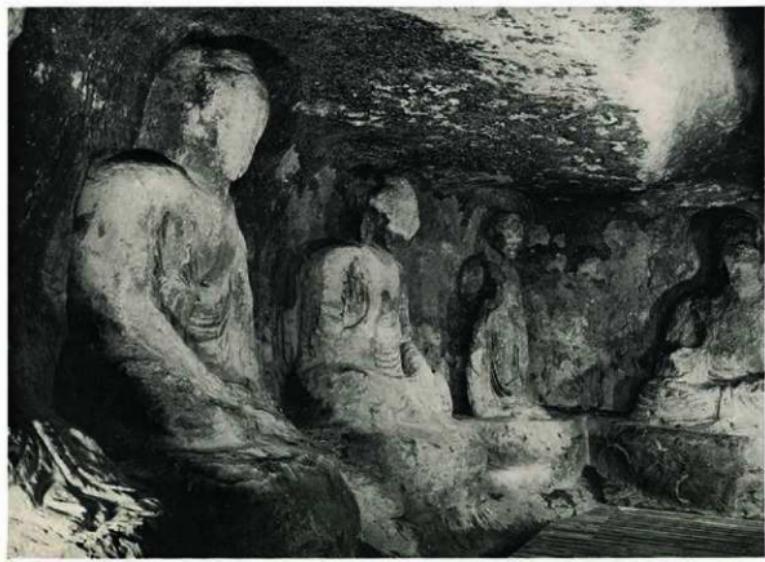


樂隊堂(4)~(5)中間飛天



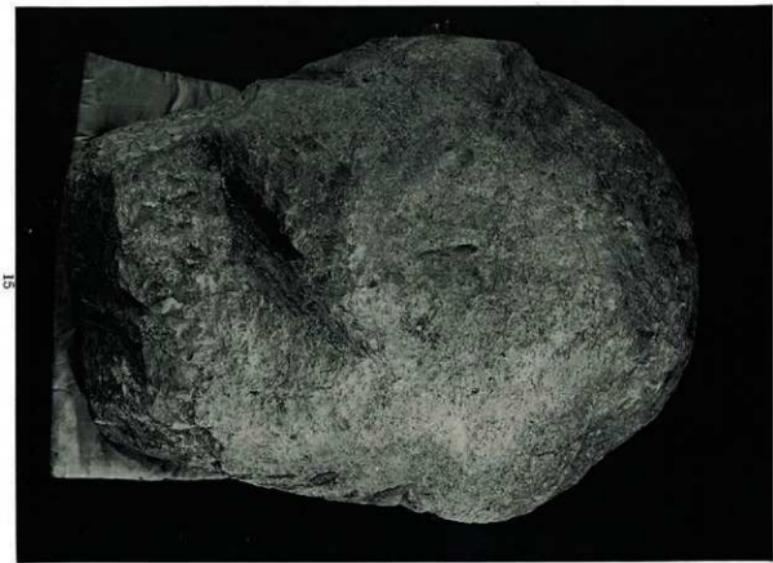
薬師堂中央より右側全景

13



薬師堂中央より左側全景

14

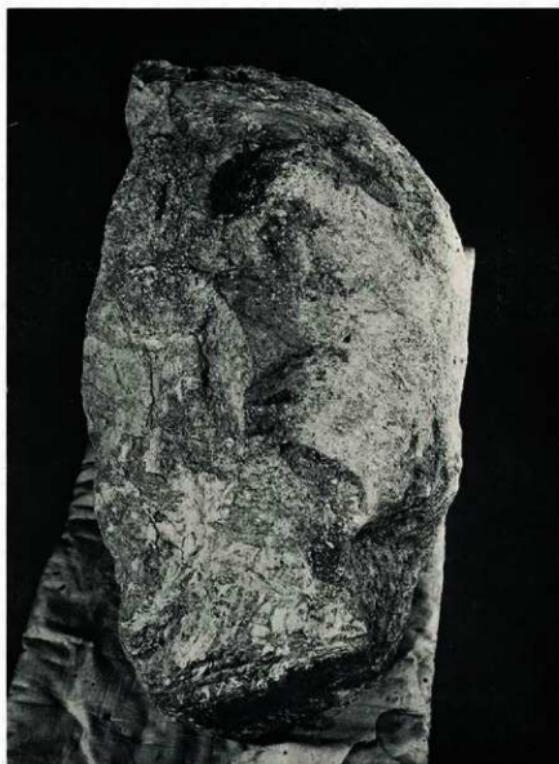


菜頭營(6)隕石頭塊正面



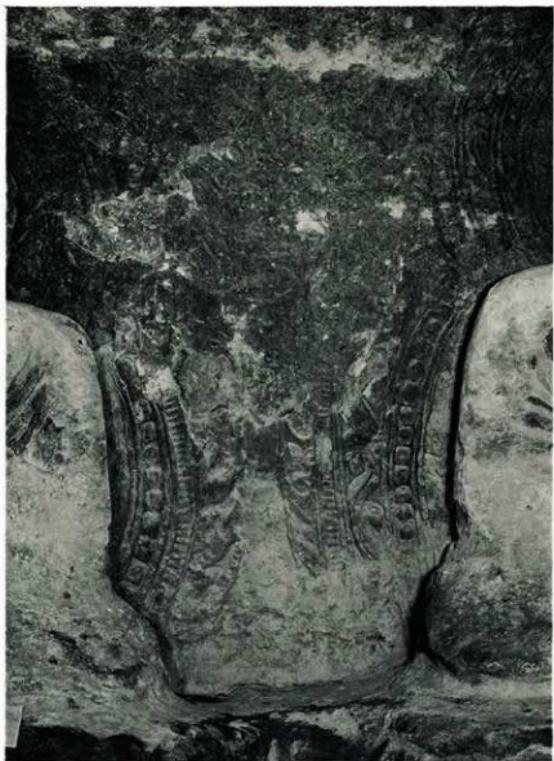
菜頭營(6)隕石頭塊後面

薦師堂(6)離落頭部右側面



菩薩堂(4)
-(5) 中間

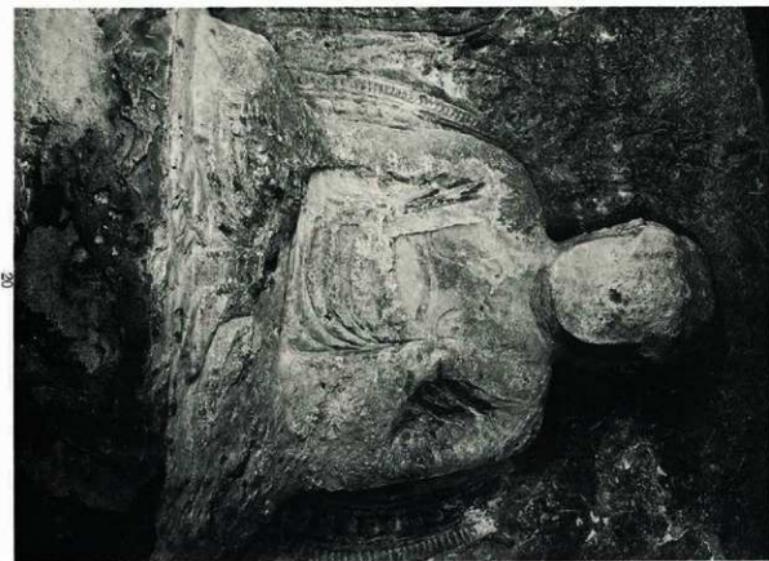
18



觀音堂正面

19

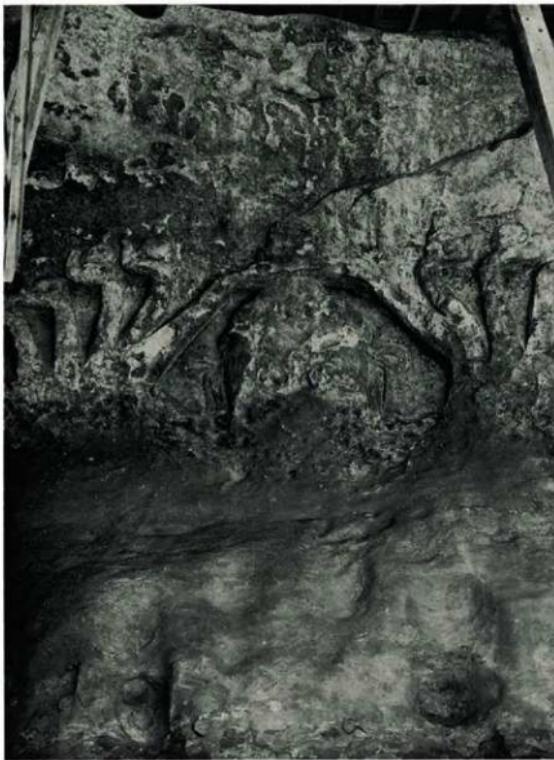




秦陶武官(正面全身)

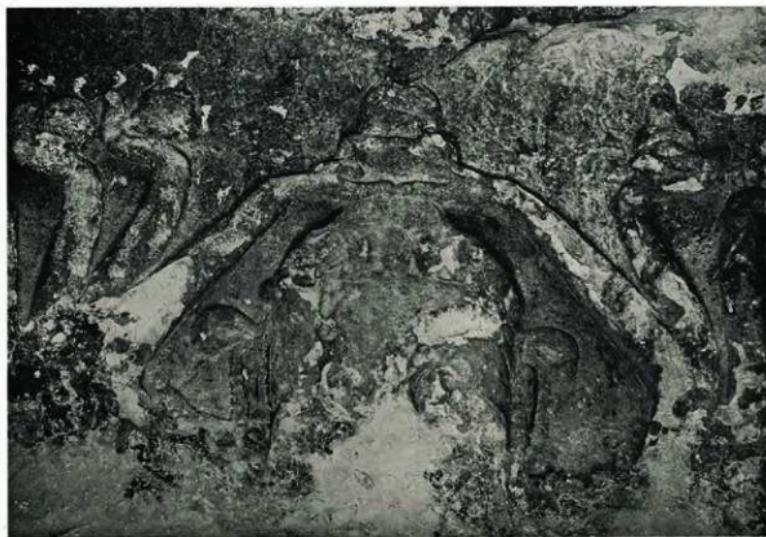


秦陶武官(背面全身)



觀音堂木尊中央部分

22



觀音堂木尊頭部

23



觀音堂木尊中央双手

24



觀音堂木尊左手方1

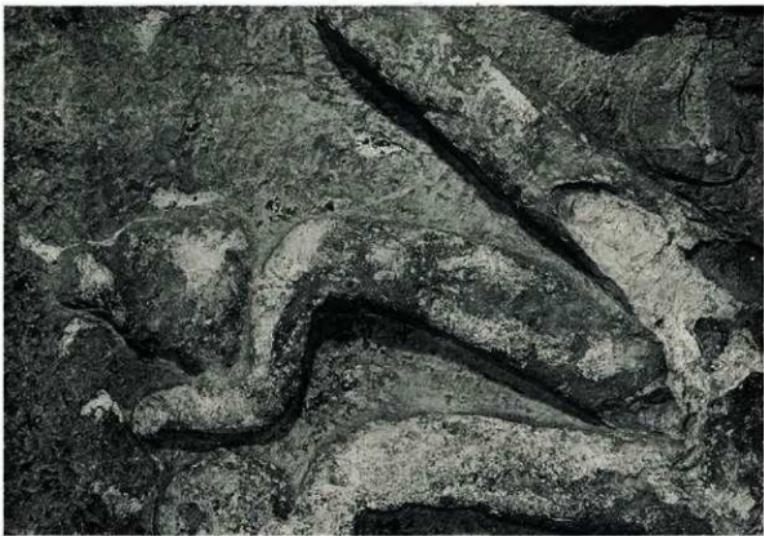
25



標普堂號子魚化石
26

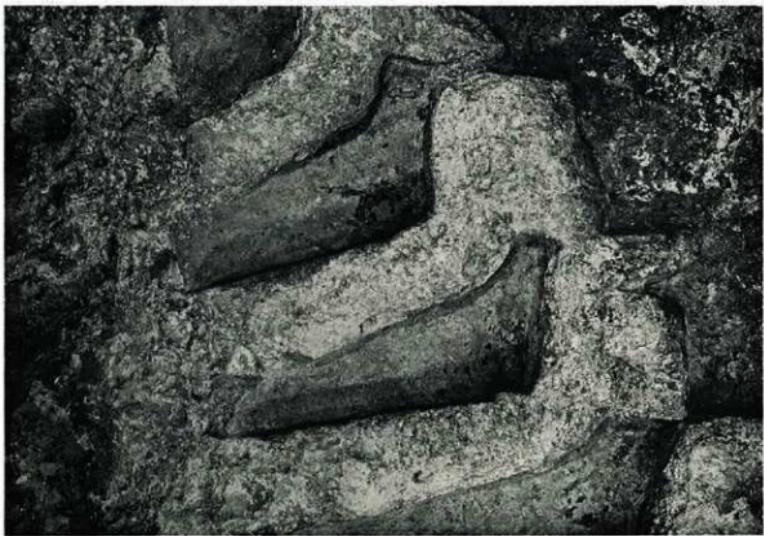


標普堂號子魚化石
27



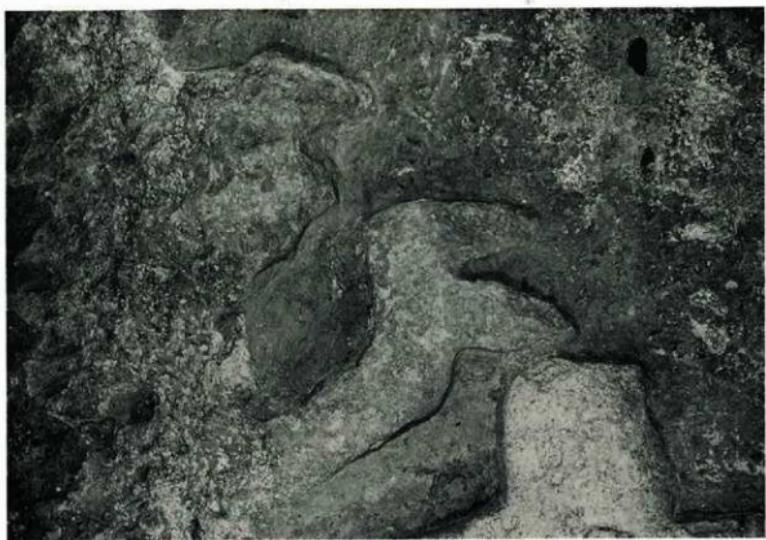
觀音堂摩崖石刻 1

28

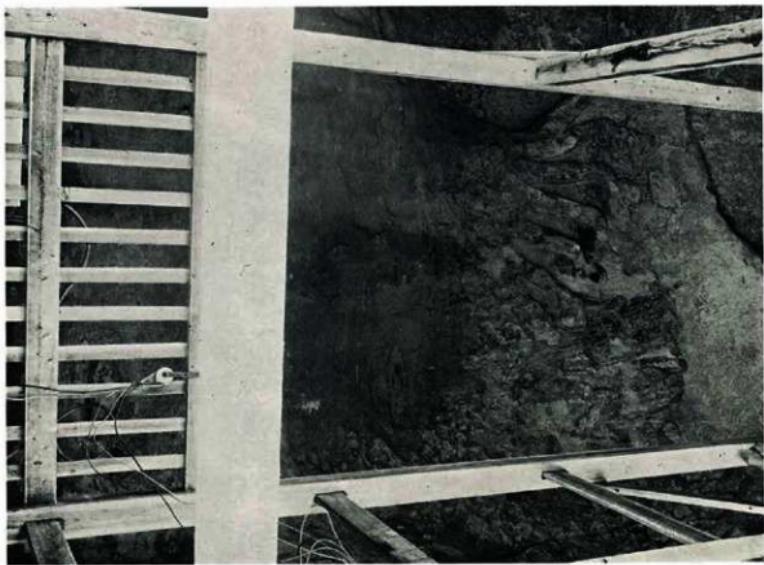


觀音堂摩崖石刻 2

29



观音堂右侧双手
30

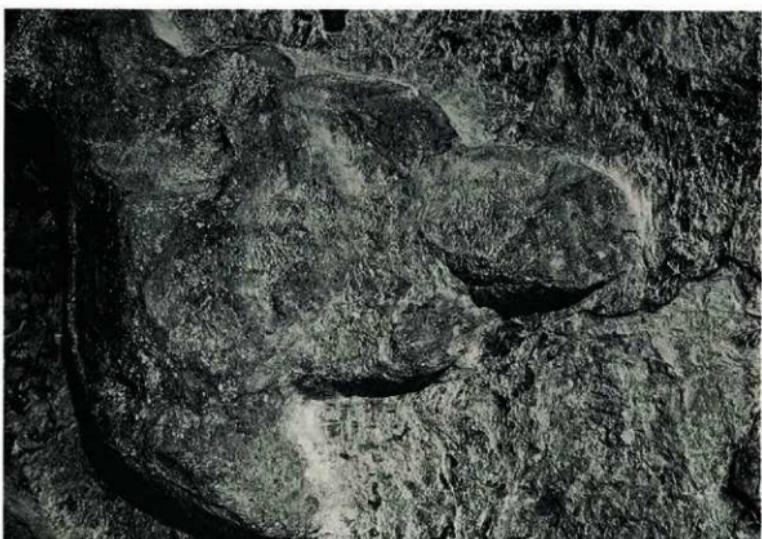


观音堂左侧双手
31



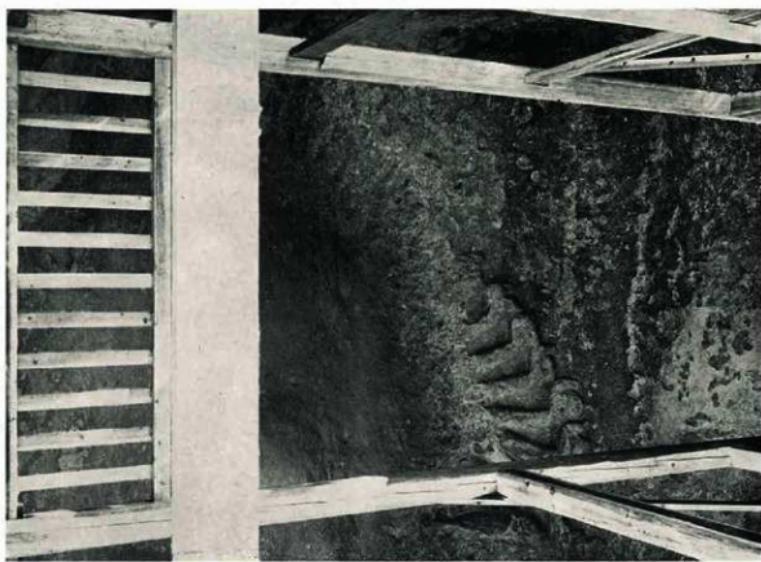
觀音堂左方趺手部分

32



觀音堂左方趺手第2 手模物

33



觀音堂石方臥手全像
34

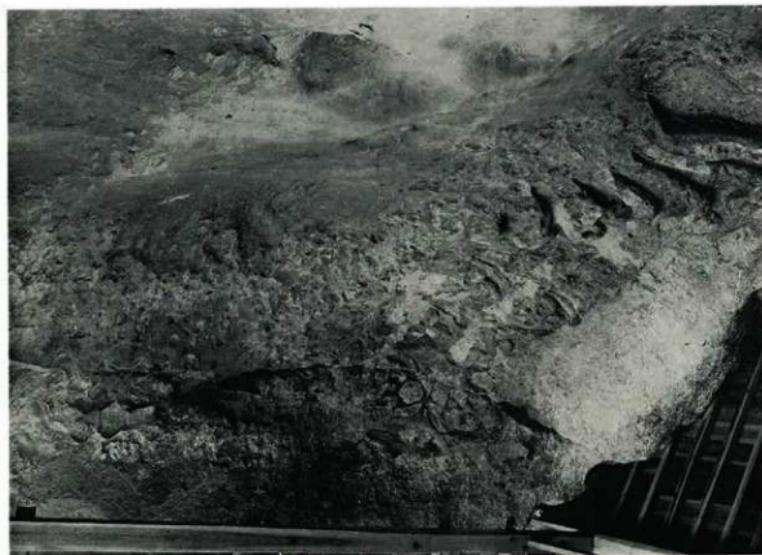


觀音堂石方臥手第2手
35



觀音堂左方牆手含心願待群金

36

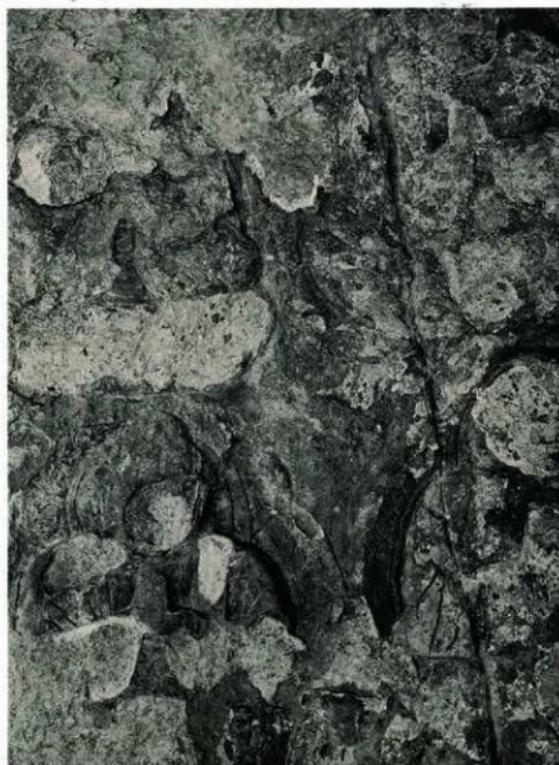


觀音堂左方牆手含心願待群金

37



觀音堂左方脇侍群
38



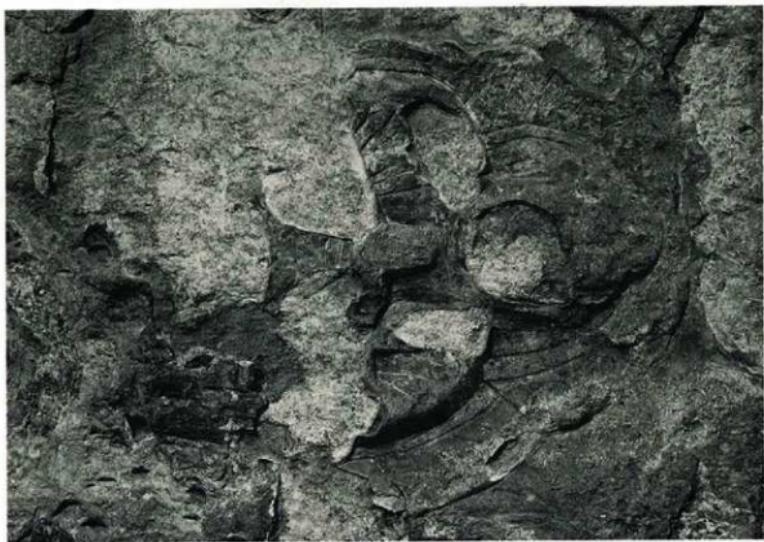
觀音堂左方脇侍部分
39



觀音堂左方龕侍像部分
40



觀音堂左方龕侍像部分
41



圖二
武侯左方臘侍部分
42

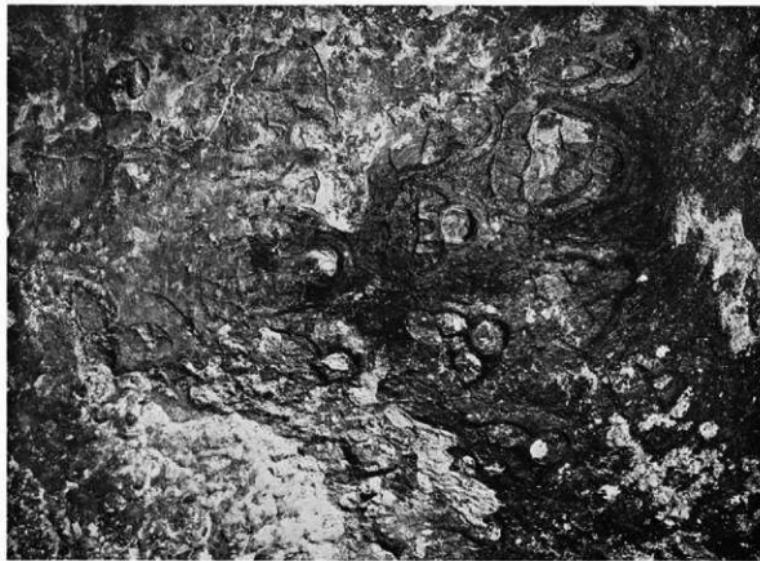


圖二
武侯右方臘侍部分
43



觀音堂石方體侍群

44

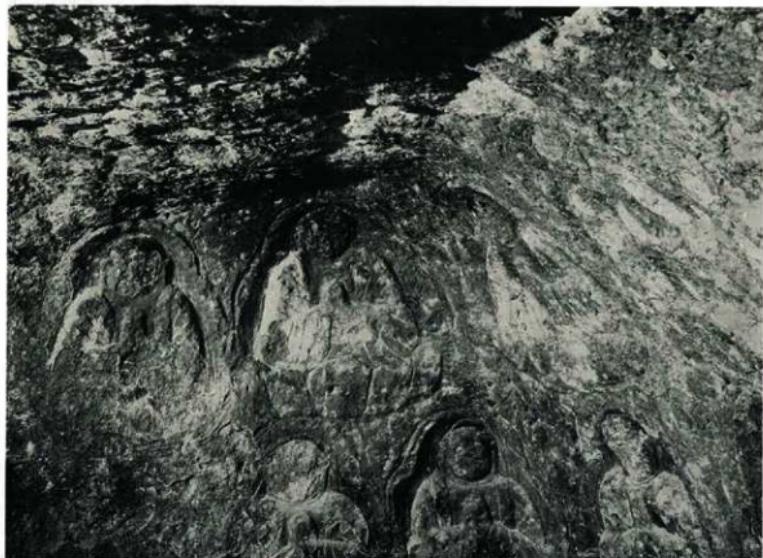


觀音堂石方體侍群

45

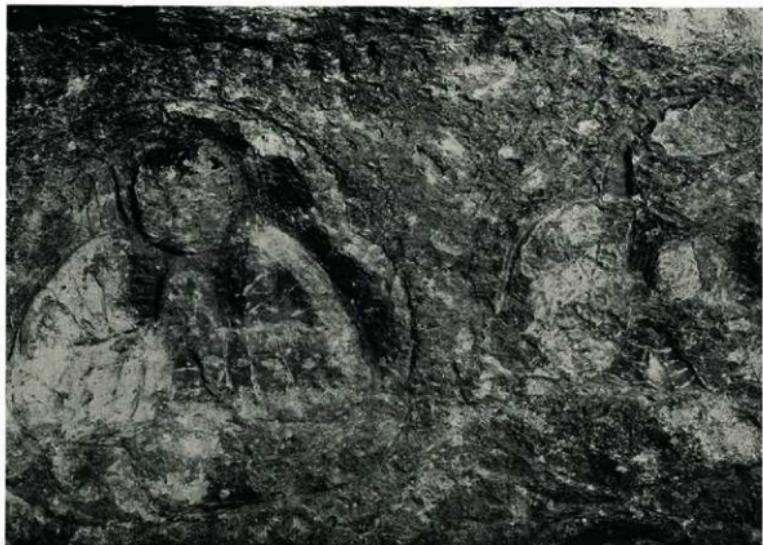
觀音堂右方胁侍部分

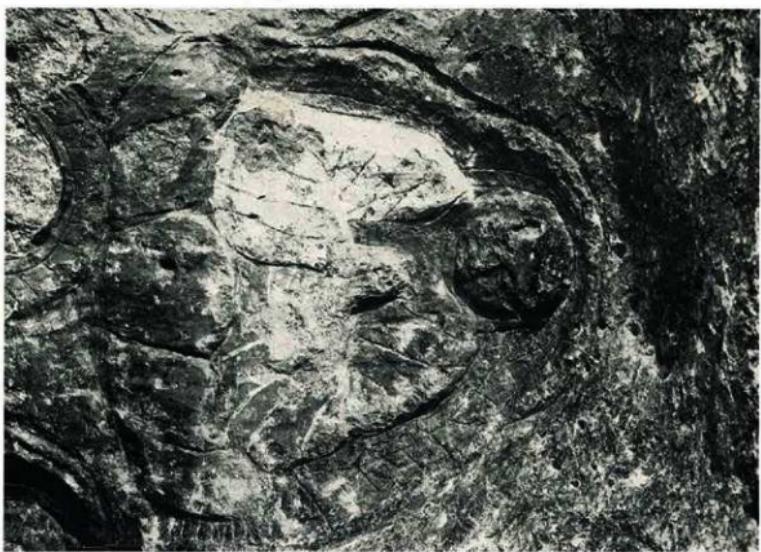
46



觀音堂右方胁侍部分

47





觀音堂石方塾傳面分

48



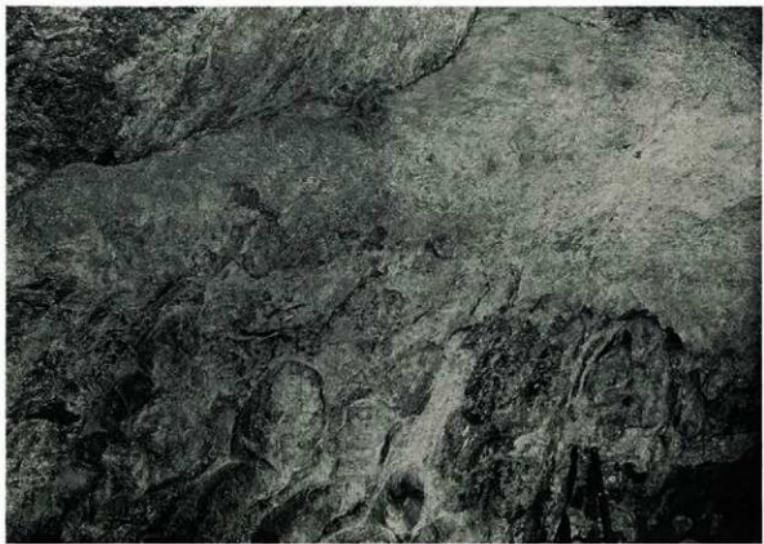
觀音堂(8)~(9)中間觀音堂又像

49

觀音堂右方牆傳印分 50

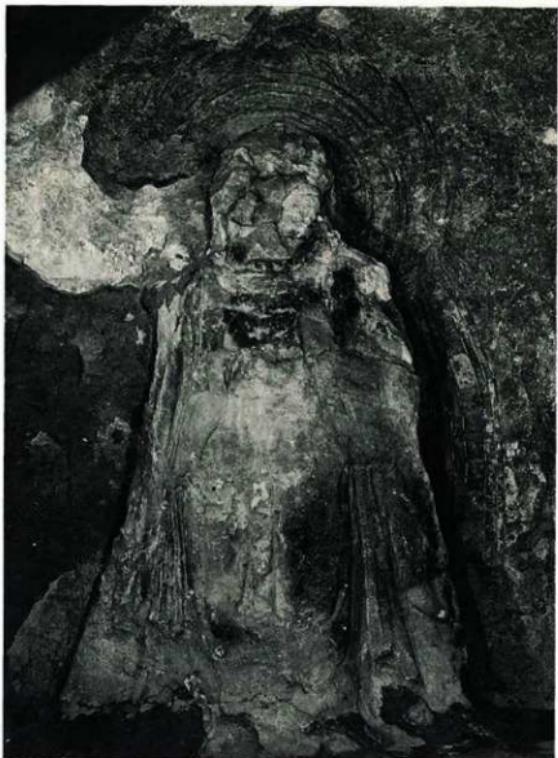


觀音堂左方牆上方 51



藥師堂(6)正面全身

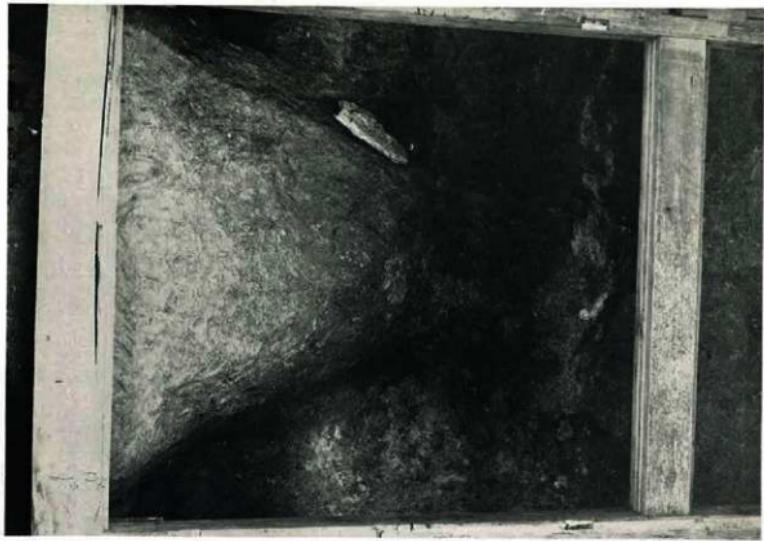
52



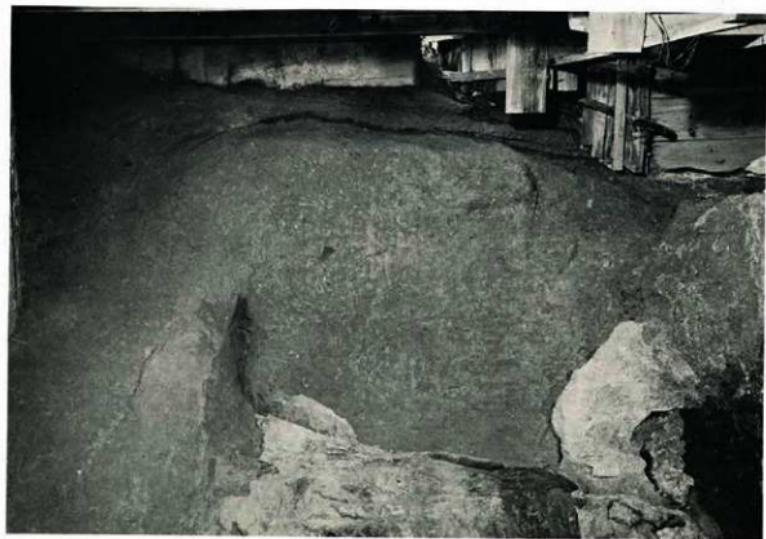
阿弥陀堂正面

53

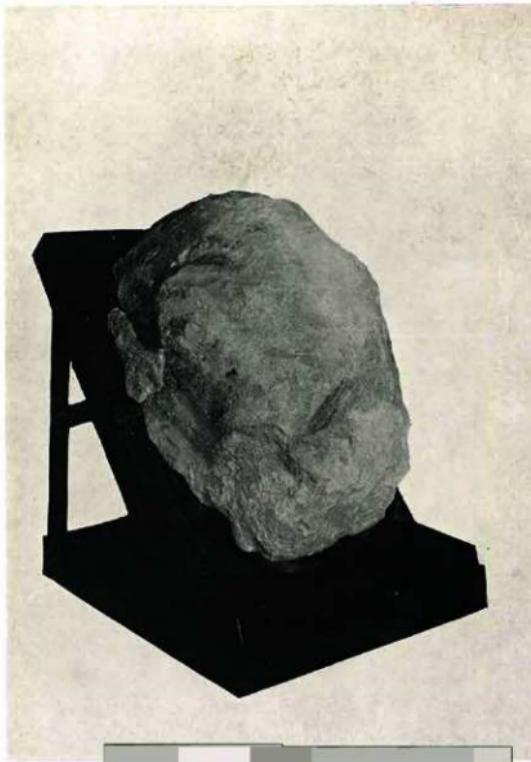




54
洞内斜面正側

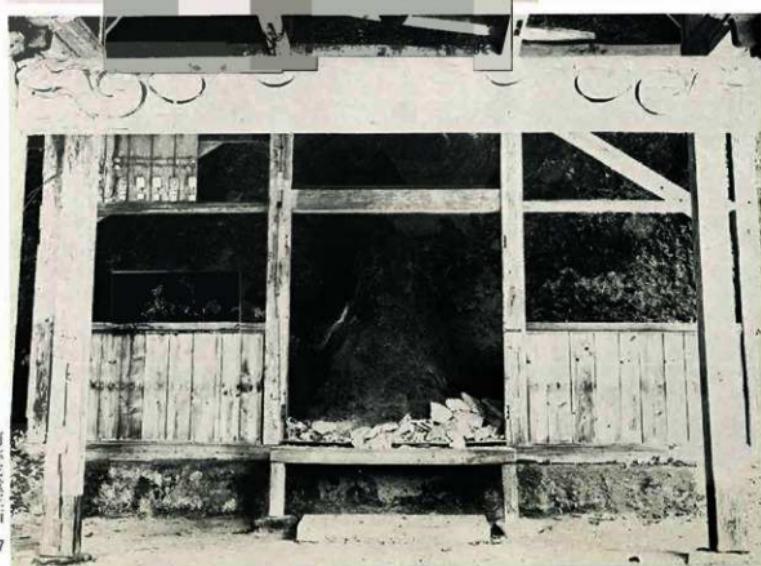


55
洞内通路の真がの跡を示す



楽師堂(6)の頭部を鉄製アングル台に固定した状態

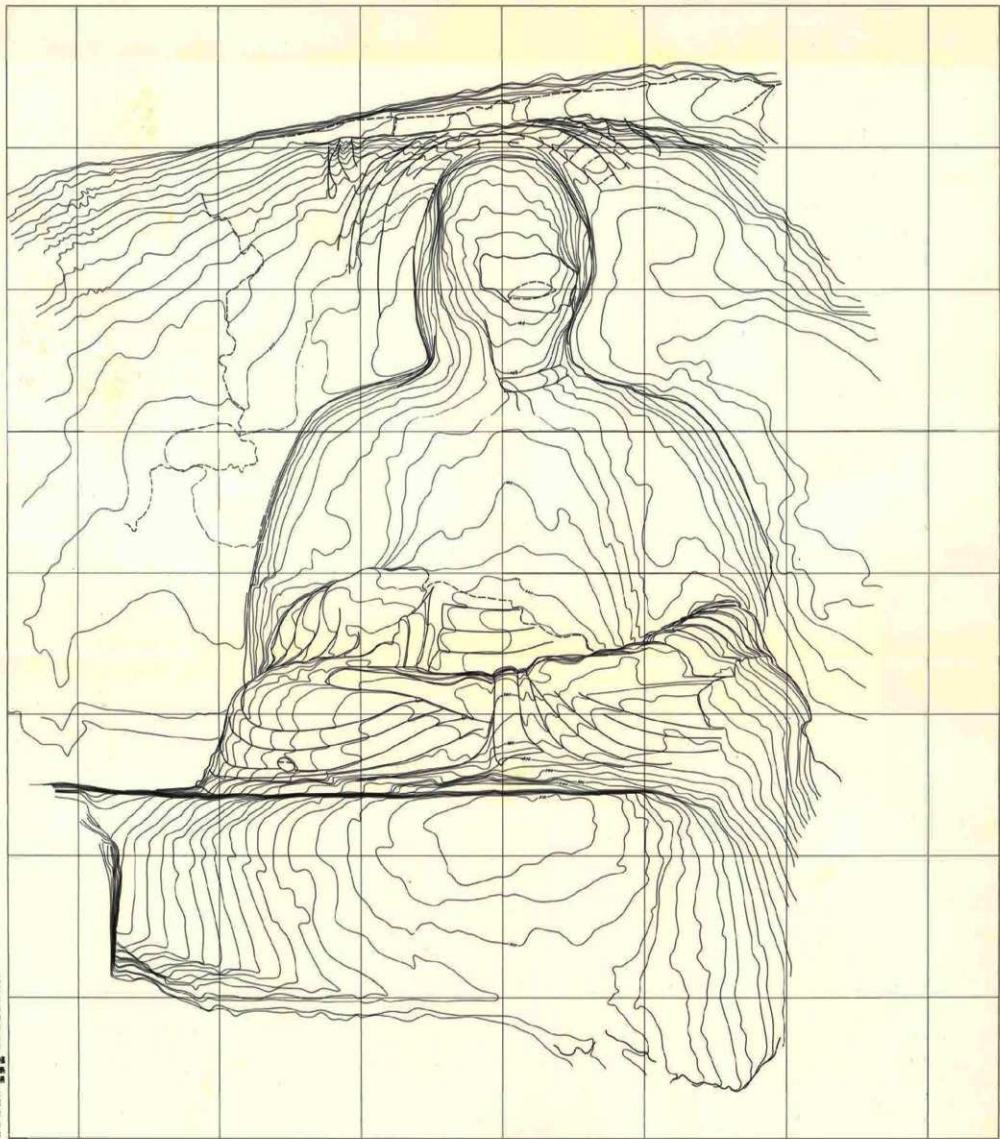
56



阿弥陀堂正面

57

像坐佛菩薩如來佛菩薩石堂跡史



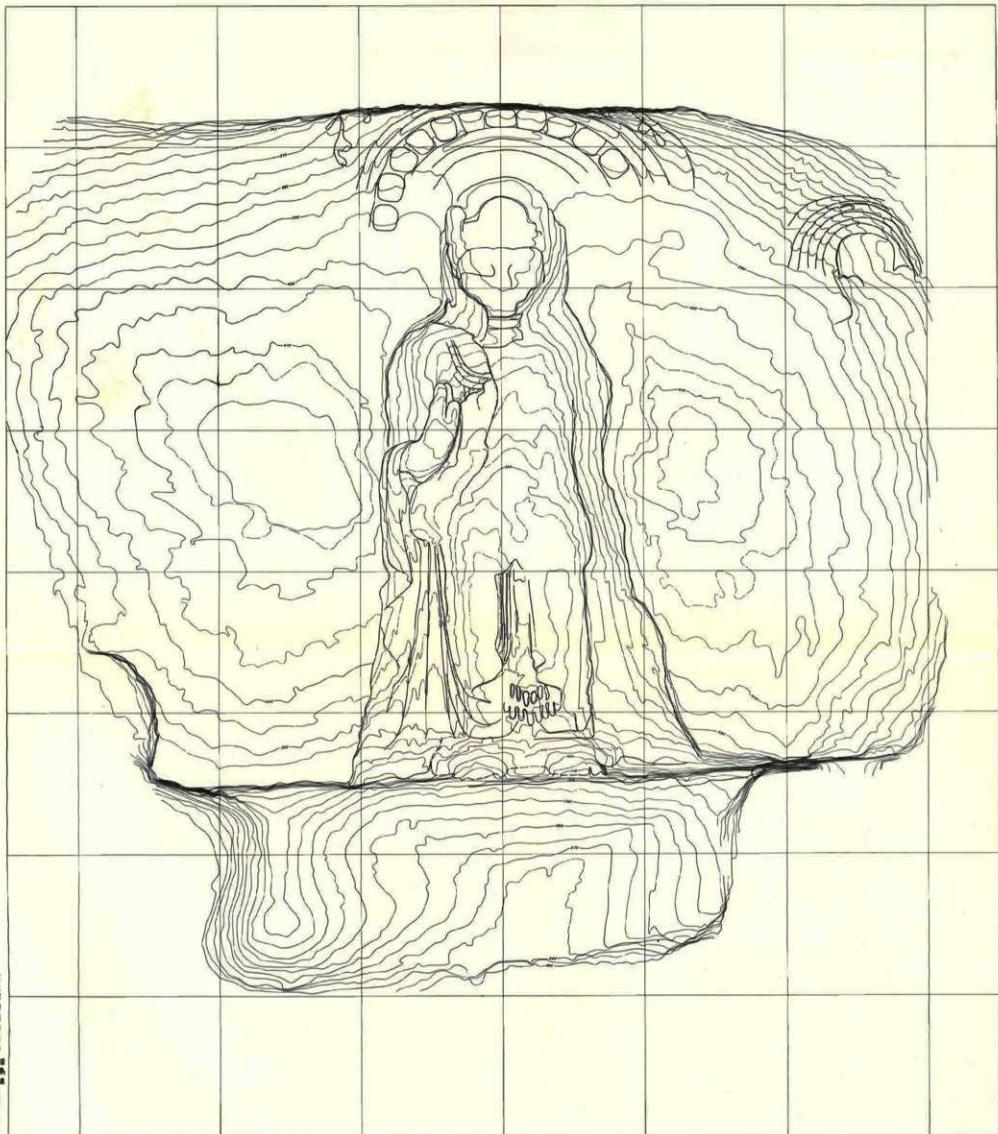
文化財保護法による
小施設の登録登載

年月日
年月日
年月日
年月日

1 6 11 16 21 26 31

大林
夢・想
生産技術研究会
事務局

像立菩薩觀音菩薩石佛像



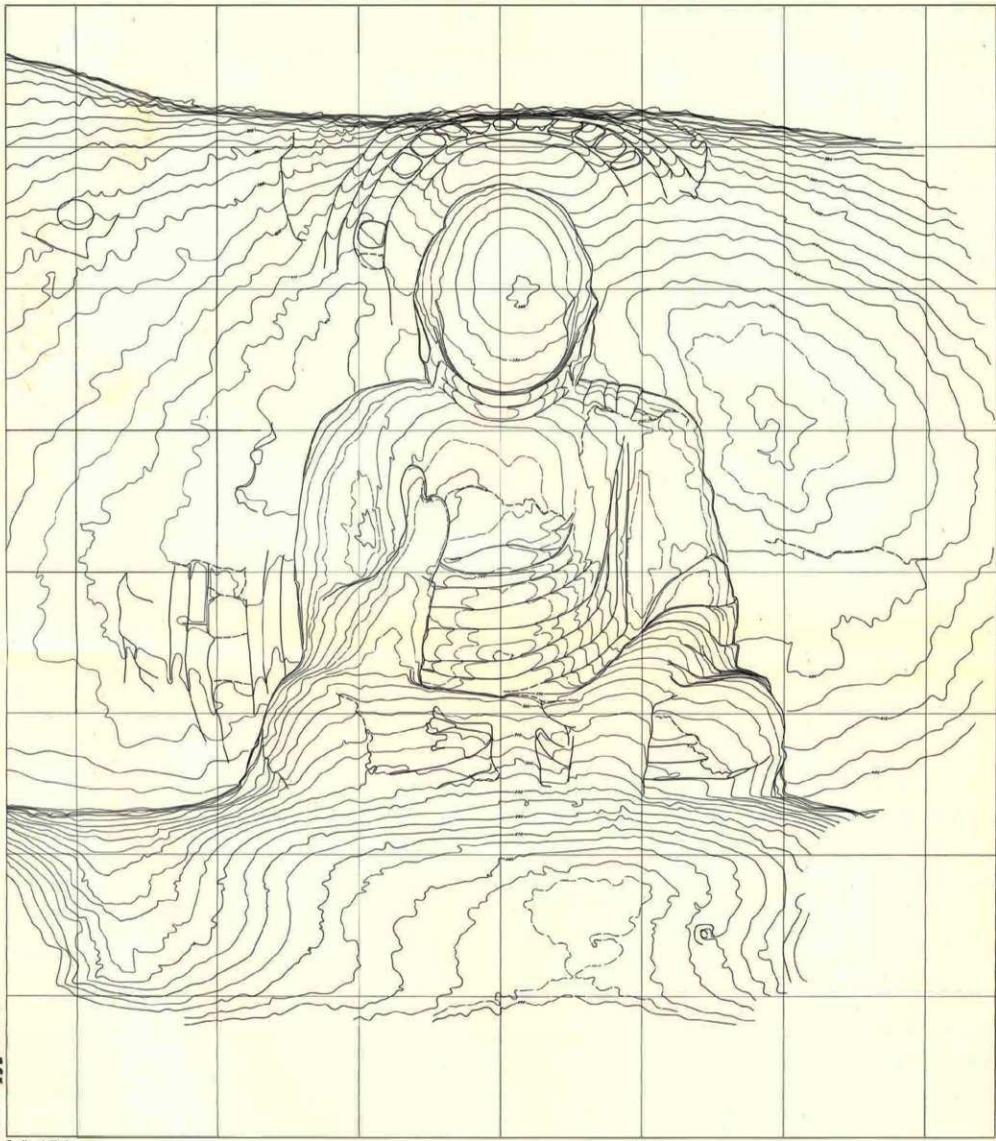
文化部藝術資源庫
小寫真

編號：1995年1月
尺寸：25x35cm
說明：無

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

九三班
人四
五度
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

史跡 繪 師 堂 石 佛 伝 弥 勒 佛 坐 像



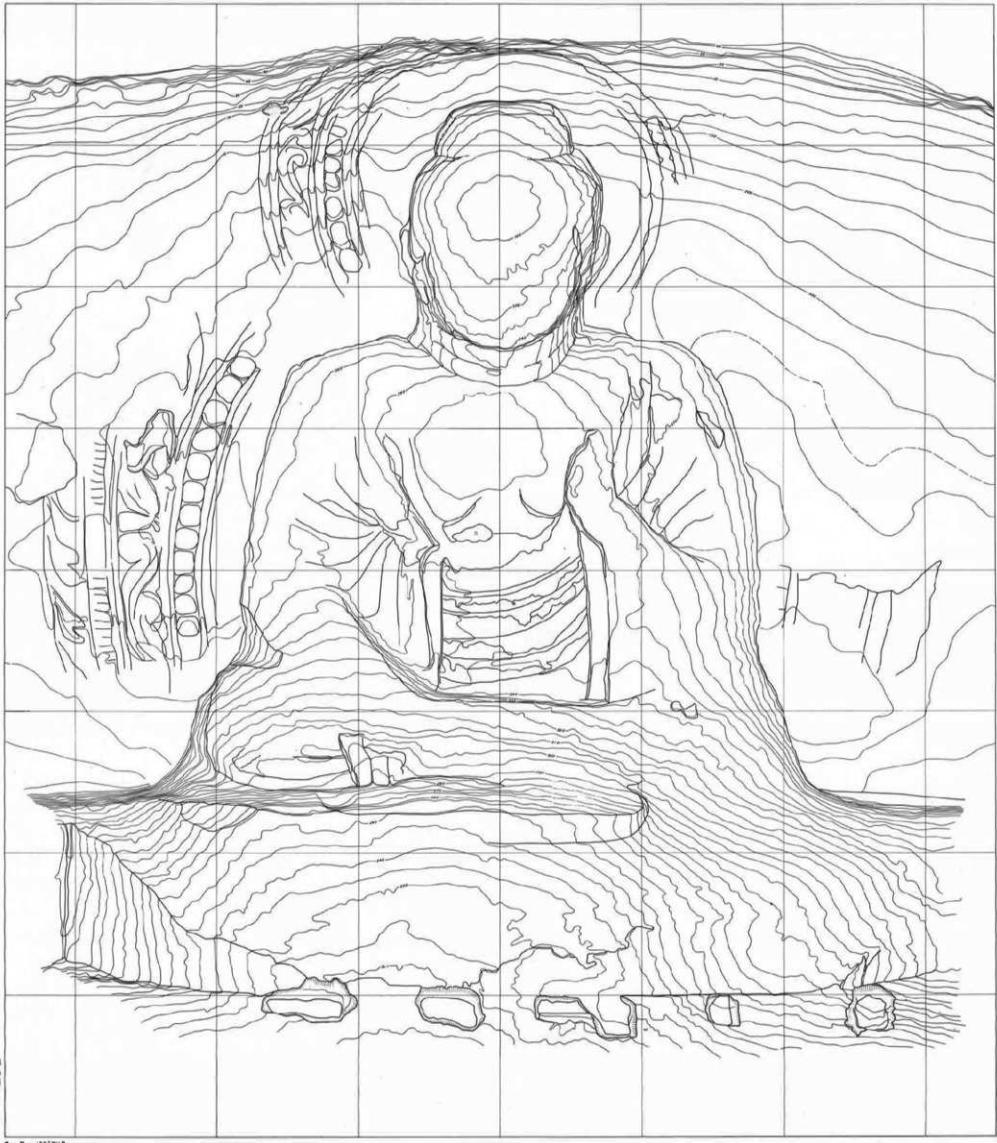
文化財保護委員会
小幡島町歴史資料館

昭和45年1月
第1号
監修：小幡島町長
監査：文化財保護委員会

10 5 0 5 10

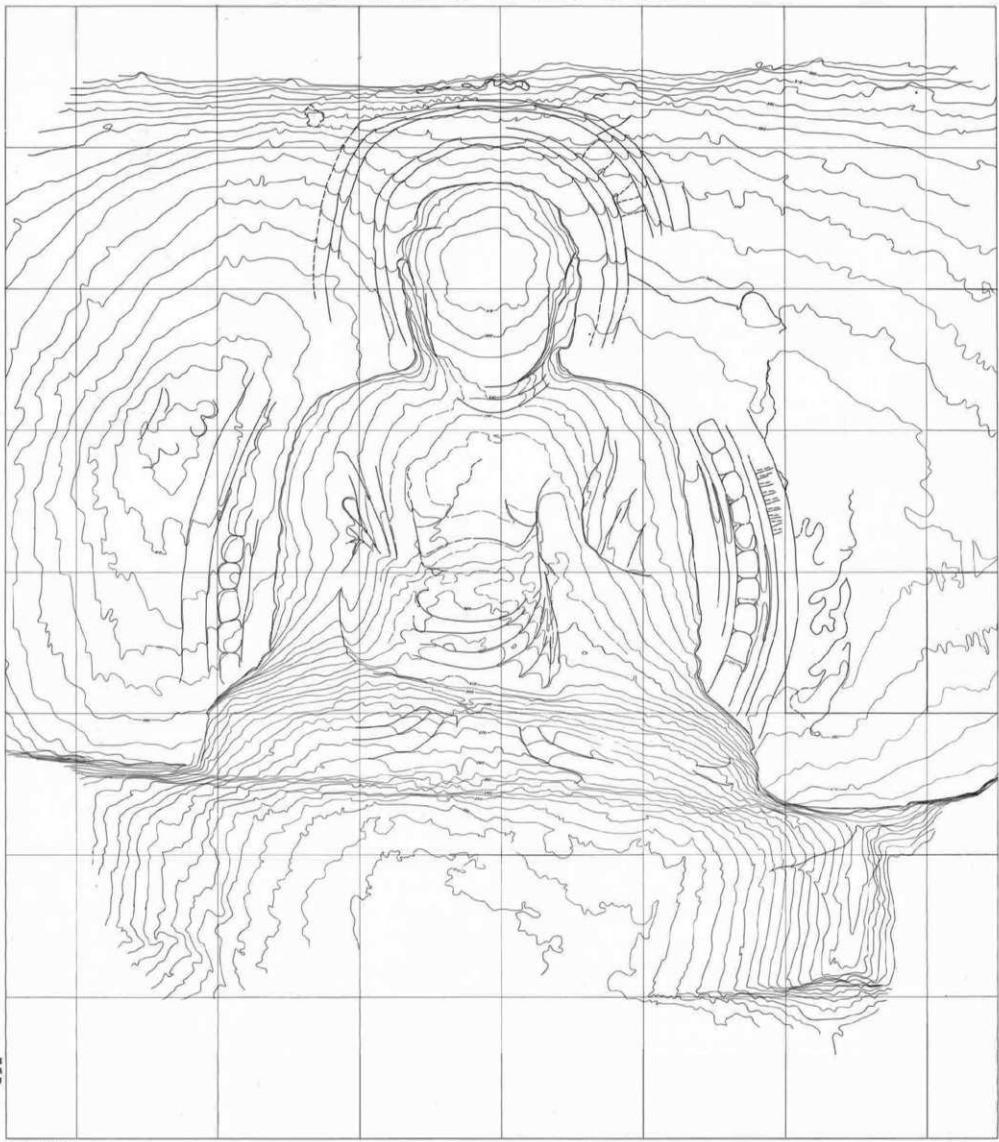
人間環境
文化財保護委員会

史跡 藥師堂 石仏 坂如來 像



1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11

像生佛仙菩勒仙堂藥師跡史



文化部民族藝術中心
小圖影印
音質音頻

圖書編號
卷之二
編號
人名
地點
年份
卷之二

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 m²

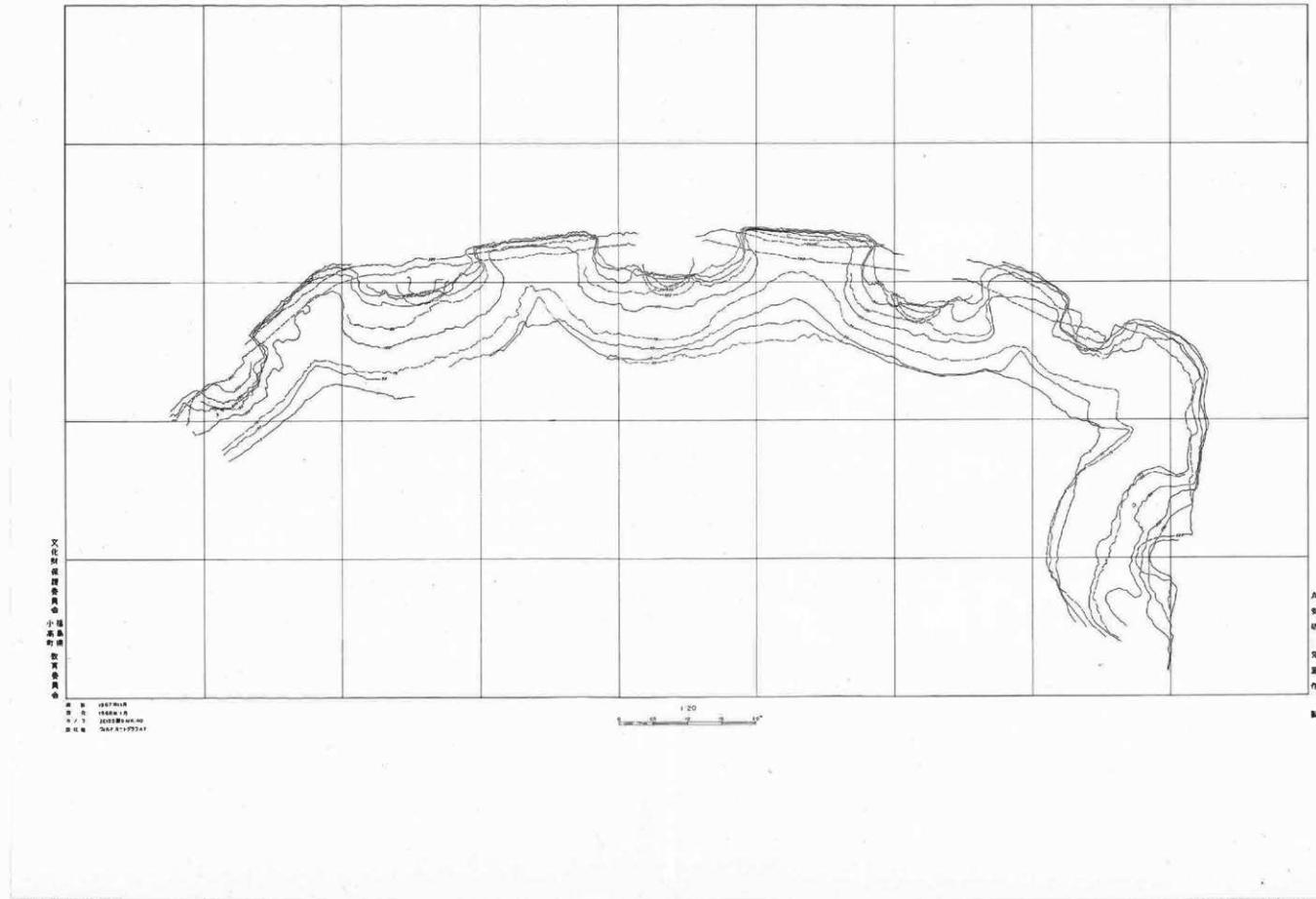
大清世
人世
生
活
所
在
處
會

史跡 薬師堂石仏伝觀音菩薩立像

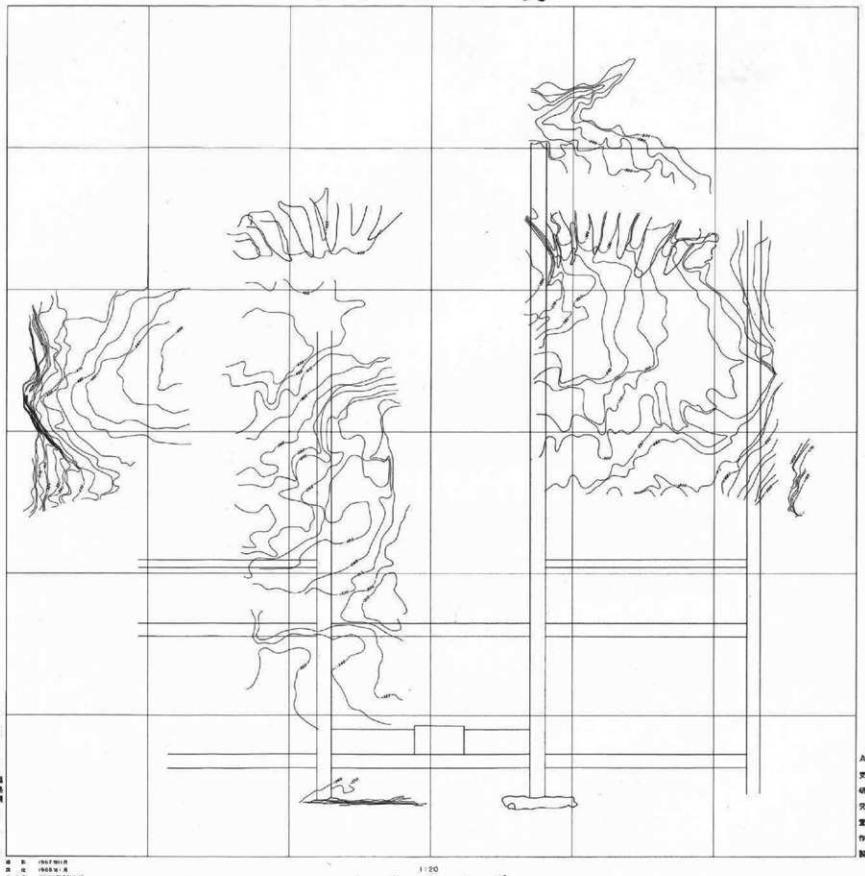


0 10 20 30 40 50 cm

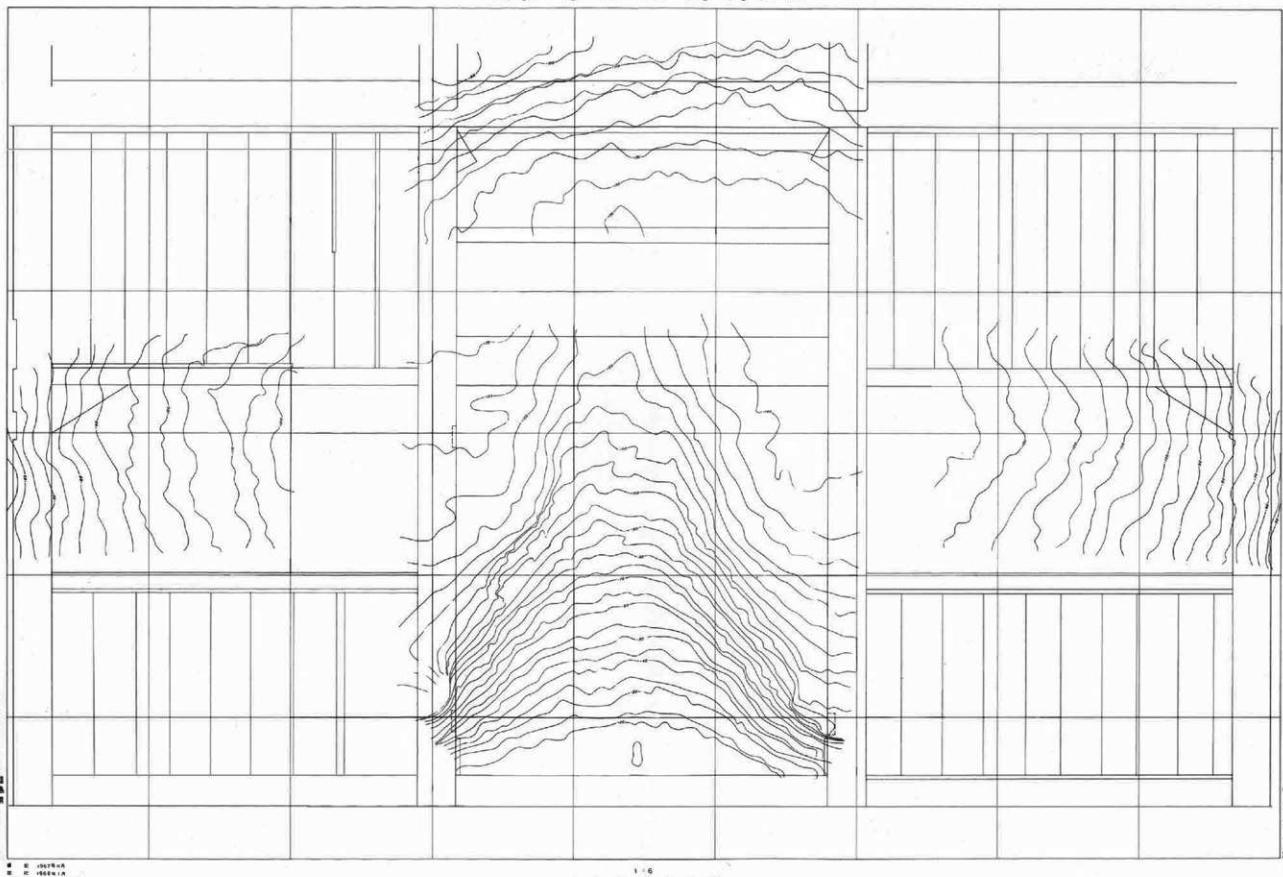
史跡 藥師堂 平面圖



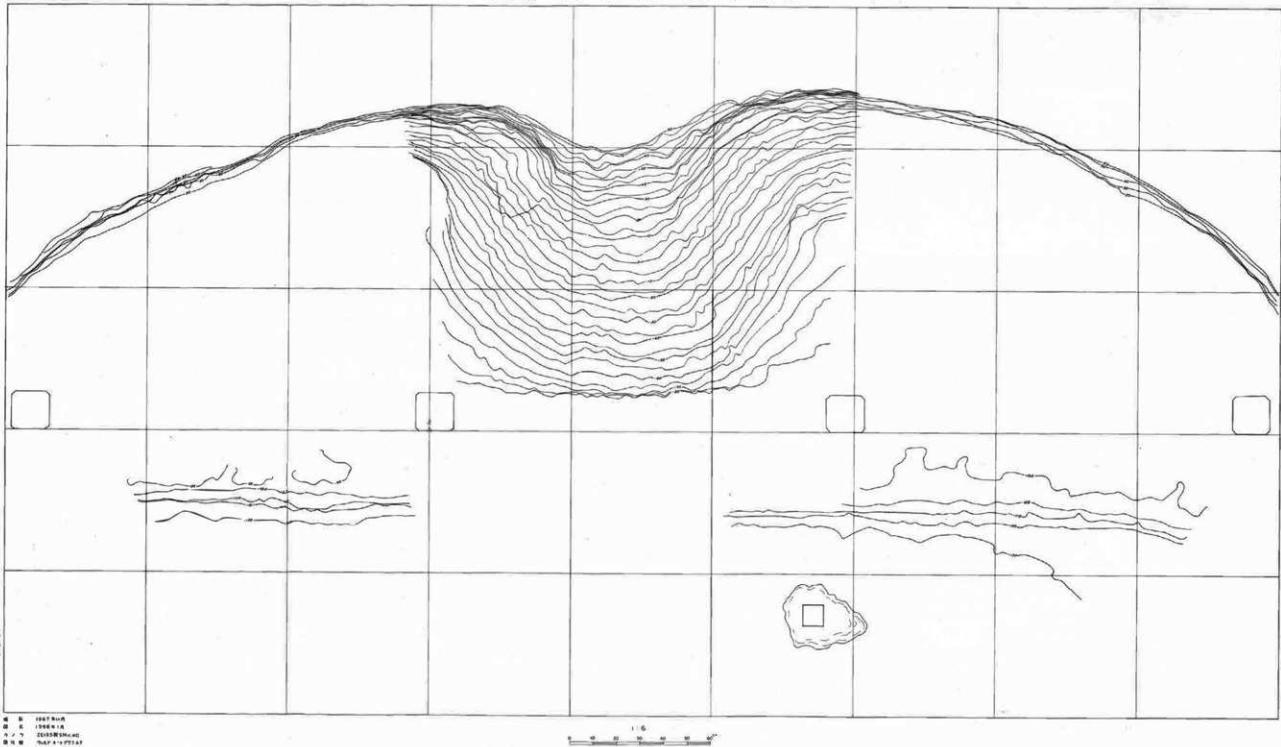
史 跡 觀 音 堂



史跡 阿彌陀堂正面図



史跡 阿彌陀堂 平面図



文化財保護委員会
小笠原村農業委員会

地圖
1998年1月
大日本
縮尺
1:100

八幡山
人作
天主教
聖母像
文書
資料

昭和四十三年三月

史跡 薬師堂石仏

修理工事報告書

史跡 観音堂石仏

発行者

福島県相馬郡小高町

印刷者

東京都荒川区西日暮里五十九八
三美印刷株式会社